

INFORMATION *Circular*

THE JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

<http://www.bcasj.or.jp/jsdb>

HP記事随時更新中(サーキュラーより早い)!
求人記事・集会案内記事大募集中!!

■ 第14回国際発生生物学会大会(第34回日本発生生物学会大会)のお知らせ	1
■ 2000年大会の総括	2
■ 発生生物学会大会参加記	4
■ 日本発生生物学会運営委員会議事録	9
■ 第33回 日本発生生物学会総会議事録	14
■ 学術会議第4部会員から	17
■ 教官公募・ポスドク募集の案内	17
■ 研究助成金・各種募集案内	18
■ 公益信託・團生物科学国際基金助成事業終了のお知らせ	35
■ 研究集会・シンポジウム案内	37
■ 事務局から	40
■ 会員異動	41
■ 入会案内・広告掲載のお願い	50

NO.96

AUGUST 2000

日本発生生物学会

〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉

東北大学大学院理学研究科生物学

会 長：〒 606 京都市左京区北白川追分町
-8520 京都大学大学院生命科学研究所
竹市雅俊 (Tel: 075-753-4196)
(Fax: 075-753-4197)
(e-mail: takeich @ take. biophys. kyoto-u. ac. jp)

D G D 編集主幹：〒 153 東京都目黒区駒場 3-8-1
-8902 東京大学大学院総合文化研究科生命系
浅島 誠 (Tel: 03-5454-6632)
(Fax: 03-5454-4330)
(e-mail: asashi @ bio. c. u-tokyo. ac. jp)

事 務 局：〒 980 仙台市青葉区荒巻字青葉
-8578 東北大学大学院理学研究科生物学教室
Tel: 022-217-3489 Fax: 022-217-3489
e-mail: jsdb @ jcasj. or. jp
(幹 事 長) 井出宏之 (Tel: 022-217-6691)
(庶務幹事) 田村宏治 (Tel: 022-217-3489)
(会計幹事) 出口竜作 (Tel: 022-214-3413)

学会センター：〒 113 東京都文京区本駒込 5-16-9
-8622 財団法人 学会事務センター
日本発生物学会担当係 (Tel: 03-5814-5810)
e-mail: jsdb @ bcasi. or. jp

日本発生物学会への入退会、住所・所属変更、会費納入、および出版物（インフォメーション・サーキュラーなど）の郵送については、上記の日本学会事務センターに書面または e-mail でお問い合わせ下さい。なお D G D につきましては直接、ブラックウェルサイエンス社にお願いいたします (Fax: +61-39349-3016)。

サーキュラーへの投稿募集

日本発生物学会サーキュラーは会員の皆様の情報誌として年 3 回発刊されます。学会に対する提言、研究雑感、実験手法、学会見聞記、関連学会案内、書評等どのような内容でも結構ですので、是非事務局にお寄せ下さい。

第14回 国際発生生物学会大会 (第34回 日本発生生物学会大会)のお知らせ

日程 平成13年7月8日(日)～7月12日(木)

会場 国立京都国際会館(京都市左京区宝ヶ池)

会頭 竹市雅俊(京都大学)

特別講演

Friedrich Bonhoeffer (Tubingen)

Elizabeth Robertson (Boston)

Sean Carroll (Madison)

Masatoshi Takeichi (Kyoto)

Michael Freeling (Berkeley)

シンポジウム

Evolution of the body plan

Embryo early patterning

Organizing activity in embryogenesis

Signaling in organogenesis

Neural patterning

Wiring the neural network

Development of behavior

Functional genomics in developmental biology

Polarizing cell architecture in organogenesis

Shaping and regenerating organs

Creation of cell heterogeneity

Breaking the body symmetry

Differentiation of sexes

Germ cells and gametogenesis

Patterning and transcription factors

Problems of aging

ワークショップ

Frontiers of bioimaging

Emerging genetic technology in developmental biology

Pattern generation in development: Theory and practice

Body organization in plants

Development of appendages

Generation of metamerism

Stem cell and tissue engineering

Molecular medicine and development

Development under environmental effects

特別セッション

Historical synthesis of developmental biology

ポスター演題申込み締切 平成13年1月15日(月)

問合せ: ㈱コングレ

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町14 (財) 近畿地方発明センター内

TEL: 075-752-0888 FAX: 075-762-2304

参加申し込み、プログラムなどについての詳細は <http://www.congre.co.jp/icdb/> をご覧下さい。

2000年大会の総括

日本発生生物学会第33回大会準備委員長 川 村 和 夫

会員の皆様、こんにちは。日本発生生物学会第33回大会準備委員会より大会終了の報告と大会総括を申し上げます。本大会は5月25日ー27日の日程で高知市内で開催されました。参加者の皆様が全国各地から高知に熱気を運んでこられたのでしょうか、大会期間中は前後の週と比較して5-6度も気温が上昇しました。上昇気流が雨雲を呼んでついには持ちこたえられなくなり、大会最終日は土砂降りとなってしまいました。兎も角も、すべてのスケジュールを何とか無事終了できたのは、参加の皆様の忍耐とご協力のおかげと心より感謝しております。

さて、このサーキュラー誌上の総括は数少ない大会公式記録の一つですので、それを意識してこの記事を書くことにしました。最初は参加者と演題数について。大会の参加登録と演題登録の事務処理は、昨年同様「学会事務センター関西」にお願いしました。事前参加登録者は449名、演題エントリーは347題をいただきました。昨年の一般演題の総数が311題でしたので、演題数の右上がり傾向は今年も維持されました。大会の準備を始めた当初、私たち準備委員会は550名の参加者を見積もりました。この数年の参加者数の推移と高知という交通の便の悪さを勘案した数字です。「もっと多いのでは」というご意見もいただいたのですが、約450名の事前登録者数が確定した時点で、私たちの予測に確信を持ちました。土佐の地名に引かれて参加を希望される人が相当数いるとしても、その人たちは積極参加派だからきっと事前登録を済ませているはずだ。当日参加はせいぜい100名だろうというのが予測の根拠です。大会初日、当日受付に長蛇の列を見て、大会準備委員長の顔から「確信」の二文字がはらはらとはがれ落ちたのは言うまでもありません。結局、205名の当日登録をいただきましたので、公式参加者数は654名となりました。初日にして大会運営の難しさを思い知らされました。

話は前後しますが、第33回大会の開催打診を岡田益吉会長（当時）よりいただいたのは2年前（1998年）の1月のことでした。学会を主催させていただくのは名誉なことで、2000年という区切りの年に魅力を感じ、「頼まれたことはお断りするものではない」という先達の言葉にとどめを射されて、直ちに承諾の返事を岡田会長に差し上げました。2年の猶予期間中に開催された大会は私たちに大変参考になりました。が、多士済済のスタッフを擁した第31回熊本大会とも、優秀なスタッフに加えて資金力豊富な都市をパトロンにもつ第32回神戸大会とも、当然の事ながら高知は事情が異なっていました。シンプルな大会を目指した私たちは、一般公募を含むシンポジウムとポスターの2本柱を企画しました。シンポジウムで私たちが提案した原案は、1) 極性と非対称、2) 遺伝子の発現調節、3) 発生を制御するシグナル伝達、4) 組織分化と器官形成、5) 神経回路網の形成、6) 組織の再構築、7) 発生システムの進化でした。1999年10月末をめどにホームページとサーキ

ユラーでオーガナイザーを公募しました。お引き受けいただいた先生方と最終決定したシンポジウムのタイトルは下記の通りです（進行順）。

佐藤矩行（京大・院・理）「発生システムの進化」

阿形清和（姫路工大・理）「発生・再生を支える幹細胞システム」

能瀬聡直（東大・院・理）「神経発生のメカニズム～神経細胞の分化から回路形成へ～」

野地澄晴（徳島大・工）「発生・再生を司るシグナル分子」

小林悟（筑波大・生物科学系）「生殖にかかわる細胞の特質」

田村宏治（東北大・院・理）「器官構築とその再構築」

再生に関するテーマが3題並んでいるのが2000年大会を特徴づけています。なお、能瀬先生と野地先生は当日のご都合が悪く、岡本仁先生（理研）嶋村健児先生（東大・院・医）と濃野勉先生（川崎医大・分子）に各々座長を交代していただきました。オーガナイザーの先生方には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

今年の大会発表ではシンポジウム講演を一般公募しました。一人のオーガナイザーがシンポジウムを仕切れるのは、休憩を入れたとしても、4時間が限度であること、一つの講演に平均20分間は割り当てたいといった理由から、応募演題の多くはポスターに回っていただかざるを得ませんでした。ご発表内容のクオリティーとは必ずしも一致しないで変更を余儀なくされて、不愉快な思いをされた方々がいらっしゃるのは承知しております。何卒お許しください。

登録後のシンポ希望演題の取り扱いについて簡単に報告します。シンポジウムにエントリーしていただいた演題はタイトル、演者、要旨を準備委員会高知の非公開HPにアップロードしました。それらをオーガナイザーの先生方にご覧いただき、発表演題をチョイスしていただきました。膨大な紙の量に埋もれることなく、この作業を順調に終えることが出来たと自負しています。

今年はインターネットによる演題登録を極力お願いしました。国際発生生物学会年会を兼ねる2001年の年会では、参加・演題申込受付がすべてホームページによって行われるからです。エントリー数347題のうち、HP投稿249題、メール投稿29題、紙による投稿70題をいただきました。HP以外の方法による投稿が意外と多かったのですが、大会準備委員会が入手した情報で最も多かったのは、「入力に手間取って、締め切りに間に合わなくなりそう」、というものでした。この点についてはHP委員会と大会準備委員会がアンケート調査を実施しました。プログラムに問題があったとすればどの部分か、来年に向けてどこを改善すべきかなど、詳細な分析をHP委員会が行うことになっています。

最後になりましたが、準備委員会が大会参加者数を下方査定してしまったために参加者の皆様に「狭い」「暑い」思いをさせていただきました。心よりお詫び申し上げます。またそれを「熱気あふれる議論だった」と、やんわり論じていただいた心優しい参加者の皆様に心よりお礼申し上げます。

第33回大会印象記 — 高知での新しい試みに関して

東京工業大学・生命理工学研究科・生体システム専攻 西 田 宏 記

高知で行われた第33回大会では、質の高い発表と討論を楽しませていただきました。配慮の行き届いた大会の裏には、準備委員会の皆様の十分な準備とご尽力があったことと思います。

さて、大会印象記を頼まれたのですが、一つ前の段落で準備委員会の労をねぎらわせてもらいましたので（本当に感謝しております）、このあとに大会や日本の発生学に対するほめ言葉を並べ上げて、あまりおもしろくはありません。そこで、ちょっと辛口の印象記に仕立て上げるべく、筆を進めていくことにします。

今回の大会の特徴は、なんといってもシンポジウム中心の進行にあったと思います。みなさんの印象はどうだったでしょうか。シンポジウム中心の進行は、国際発生生物学会等の国際学会やアメリカの学会、大規模な学会によく採用されている方法です。今回の大会においてそれを試行してみられたことを評価する反面、辛口のコメントとしては以下のものがあげられるのではないのでしょうか。

1. シンポジウムのテーマが、偏ってはいなかったか？ 毎年の大会の運営は、大会準備委員会に任されています。各大会において独自の特徴を打ち出すか、それとも例年どおりにやるかは難しい問題を含んでいますが、これは基本的に準備委員会にお任せすることに賛成します。さて、今回の大会は多少、幹細胞と再生色の濃いものとなっていました。これは最近の再生医工学の興隆や、大会委員長の思い入れが反映されたということでしょうか。しかし、なるべくなら、広い分野をカバーし、様々な分野で活躍している研究者に口頭発表の機会を与えることは、この学会の規模としてまだ可能なことであると思います。私の研究分野に関してもそうだったのですが、今回の発表登録の際に、分野の選択に困った方も多かったかもしれないと思っています。

2. シンポジウムのやり方に不統一や不慣れな部分があった。今回、各シンポジウムの内容は、個々のオルガナイザーに任されていました。シンポジウム全体の長さや、その中で発表の時間は様々になっていました。特に一つのシンポジウムの長さに関しては、オルガナイザーによって決められるのではなく、準備委員会の制御の元に統一を図った方がよかったかもしれません。また、とにかく初めての試行であったためか、オルガナイズの仕方に不慣れな部分が見えるような気がしました。これらの点は、やはり、経験を積むことによって解消されていくものだと考えます。少し具体的にふれておくと、大会中のシンポジウムとして長すぎるものがあった。一つのシンポジウムに、単一の研究室から複数の発表が含まれていた等です。

3. これが、もっとも主張したいことです。大会前の危惧として、今回は口頭発表（すなわちシンポジウム）として、研究室のボスの発表が増え、学生の発表が減るのではないかというものがありませんでした。しかし、実際ふたを開けてみるとそのようなことは起こっていませんでした。その理由としては、多くのシンポジウムでは、単に発表申込者の中から口頭発表者をピックアップして選び、招待講演の数が多いわけではなかったからだと思います。この比率は各オルガナイザーに任されていたようでしたが、実際には招待講演の数は限られていました。国際発生生物学会等の国際学会や大規模な学会では、シンポジウムは招待講演といくつかのポスターからのピックアップで成り立っていることが多いようです。すなわち、ほとんどが研究室のボスの講演で成り立っています。ボスの話はよくまとまっており、教育的で、短時間にその分野を理解するのに有効です。その重要さはわかっており、シンポジウムをなくせといっているわけではありません。でも、日本発生学会が国際学会のような形式になっていくのは危惧します。すなわち、これまで当学会では若い人が続々と講演できる雰囲気は養われてきたからで、それが当学会の特徴であったと思います。学会の規模はじわじわ大きくなりつつあります。しかし今まで培ってきた、若者が大手を振って振舞える学会の雰囲気をなくしてしまうのはもったいないと思います。いったん踏み出すと、後戻りが効きにくい選択となってしまいます。“そんなことは、あなたが恐れているだけだ。発生学会は変わることがない。”という声が聞こえるような気がします。それなら、なにもいうことはなく、わたしはハッピーなのですが。

さて来年は、京都で国際発生学会です。大会形式は否応なく、国際学会タイプのものに、そして実際のプログラムもそのように組まれています。問題は、さらい年の日本発生学会がどうなるかということでしょう。高知大会の経験を生かし、活発なおもしろい大会にしていだけるようお願いしたいと思います。

高知では、朝市を見たり地元の幸を味わったりして、すこしのんびりさせてもらいました。特に印象に残ったのは、大会後に行った龍河洞です。ここには冒険コースというものがあって、ヘルメット、懐中電灯、つなぎをまとして、ガイドのひとりで洞窟探検をさせてもらいました。また高知に行かれる機会があれば是非試してみてください。いちおしです。

さて、紙面がついてしまいました。今までの大会印象記を読んだところ、ほめ言葉が非常に多かったのですが、今回は、ちょっと辛目に書かせていただきました。私の印象がどれだけ一般的なのかには疑問がありますが、今後の大会の一助にでもなればと思い、ここに記してみました。

第33回発生生物学会に参加して

信州大学 工学系研究科 鈴木 亜矢

私は、今回、初めて発生生物学会に参加しました。高知での学会ということで、やはり、海と魚（とお酒）…じゃなくて、なにかおもしろそうな話や使えそうなネタが見つかるかもしれない、と、とても楽しみにしていました。私自身は、ポスター発表もこの学会が初めてで、後々考えると、ポスターの話の流れがわかりにくいなどなど、自分自身で反省すべきことが結構あるのですが、それはともかく、今回、学会に初参加した感想を簡単に述べたいと思います。といっても、かなり気楽に参加していたので、この文章も同じように気軽に読んでもらえれば嬉しいです。

シンポジウムは、主に「生殖に関わる細胞の特質」と「器官構築とその再構築」の2つに参加しました。「器官構築」の方は、初めて聞く話ばかりだったのですが、今回の学会の中でも特におもしろく聴かせてもらいました。学会最終日のシンポジウムだったため、帰りの時間の都合上、途中までしか聞けなかったのですが、やっているテーマや方法などがユニークで、特に「私はこれがおもしろいと思う。」という姿勢が演者の方々にはっきりでているのが、とても印象的で、いいなあ、と思いました。「生殖」関連の話は、自分の研究分野と近かったため、別の意味でおもしろく聴きました。単純にひとまとめにしているのかはわかりませんが、遺伝子のクローニングに始まり、発現パターンや機能の解析等続く一連の仕事が、どんどんと進んでいる様子を聞くと、単純に、すごいなあ、世間は進んでいるなあ、などと感じます。これらの仕事は、なんとなく私の中では、数学の問題を解くときに、片っ端から（といっても、ある順序をもって）数値を式に代入して、その結果を見ていくという解法とイメージが似ていて、それを淡々とこなしていく先で、なに見えてくるのかということには、とても興味があります。

ただ、シンポジウムは、全体的に質問の時間が短めで、自分で特に質問があるという訳ではなかったのですが、どんな質問がでで、どんな答えが返ってくるのか、ということがあまり聴けず、やや残念な気がしました。

ポスター発表は、説明の時間になると、通路に人がぎっしりつまっていて、会場をざっと一周するが、結構、大変だった記憶があります。反面、議論が白熱しているポスターの前では、発表者とその周りの質問者の興奮がそのまま伝わってきて、思わず、自分がどきどきしてしまって、結構、おもしろかったです。あと、自分のポスターを貼る時、パネルが思っていたよりもやや小さめだったような気はしました（結局、ぴったりとはまったのですが。）。

学会で驚いたことはもう1つ。懇親会での料理が、豪華でびっくりしました。よかったで

す。学会の合間を縫って(?)行った、高知城や海もよかったです。坂本竜馬の像の眺める海は、きれいで大きく、特に脈絡はないのですが、なんとなく、これからも楽しく、がんばって、実験をしよう、という気分になりました。

来年は、国際発生生物学会と合同ということで、来年も、また、楽しみにしています。

第33回発生生物学会参加記

東大医 橋本一下司 和枝

発生学は、常にその時々様々な学問を取り入れて発展してきたいわば境界学問だということを聞きます。私も発生生物学会年会に、まだ片手で足りるほどの数しか参加していませんが、たしかにその時々学問的、社会的流行を受けていることを感じます。過去には、ゲノムプロジェクトが脚光を浴びてくると、ゲノムサイエンスと発生学の展開を考えるワークショップが催された年もありました。そういった観点でみれば、今年は再生、幹細胞がキーワードになっていると感じました。ワークショップとシンポジウムに再生を主題にしたセッションがありましたが、どちらも総じて発生生物学者の立場から、再生現象や幹細胞といったものの分子的性質を調べる研究発表が相次ぎました。また再生に関与する遺伝子の導入実験も着実に進歩していることが感じられました。これまでは再生研究は、組織、細胞レベルでの解析が主で、他の発生の分野に比べて遺伝子の記述が少なかったのが特徴でもありましたが、その最後の砦にも、とうとう分子的遺伝子の語葉の流れがドッと押し寄せてきていることが感じ取られました。これまでも発生学の分野のほとんどに、そういった分子的還元論の潮流が押し寄せていますが、それは全く正当な方向性を持っていたと私は推察します(まだ研究室に入る前の話が多いものですから)。というのも、これまでの組織、細胞間相互作用が礎となった上での分子への到達が明らかであったからです。しかし今回の学会における印象からは、これまでの再生メカニズムの研究でわかってきている細胞、組織間相互作用がこの土石流に飲み込まれないかと少なからず憂慮してしまいます。

学会全体を通して見ますと、主流とされる発生現象の数々はその大枠に関与する分子の実体が明らかになって久しく、今日はそれをより深く掘り下げる目的で分子間相互作用を見る者、もしくは、組織や動物種を変えて多様性を追求する者と2極化する傾向がありますが、概念的に目新しいものはなく、学問として円熟期を迎えていることが、円熟期に入ってから研究を始めた私にもわかります。皆が新しい概念やアンチテーゼを求めているこ

とは、アトモスフィアとして取れますが、はたして新しい分子や遺伝子を取ることがそれにつながるのでしょうか。それとも何か新しい方法論が必要となってくるのでしょうか。新しい方法論といえば、大会初日に数理生物学的観点から見た自立的パターン形成のメカニズムに関するワークショップが行われました。オーガナイザーが参加者に視覚的に訴える美しいパターンを作って見せてくださいました。勉強不足のせいで、数式はちんぷんかんぷんでしたが、その研究のスマートさには、非常に惹かれるものがありました。こういった研究は2, 3年前から発生生物学会における市民権を得てきた感がありますが、最近の最も新しい研究領域だと思います。工学分野では、人間の演算能力、情報量などが追いつかなくなったため、コンピューターシミュレーションモデルが研究方法の主流となっています。生物学の分野でもポストゲノム時代を迎え、膨大な情報量を扱わなければならなくなります。そのときに、こういったモデルの創出とその評価といった流れが主流になってくるかもしれません。

さて学会中に感じたことをもうひとつ申し上げますと、発表形式が前年度までのそれと比べて大胆に変化したことが挙げられます。具体的にはシンポジウム形式の口演発表とそれに伴うポスター発表の増加です。以前からこういった形式を推す流れはあったようですが、実際に行ってみて、はたして成功だったのでしょうか。今回のシンポジウムは、その名前だけが一人歩きをしていて、内容はこれまでの口演発表と何ら変わっていなかったと思います。自分もシンポジウムで口演しましたが、シンポジウムとワークショップと口演発表と何が違うのかわからない状態で発表しました。シンポジウムの中には、しっかりと方向性がオーガナイズされたセッションあり、ちゃんこ鍋のようなセッションありといった感じでした。本気でシンポジウム中心にこれまでの路線と大きく変えていくには、(金銭的な面を全く考慮に入れなければ)、外国からの招待講演者や、他の科学領域からの知恵や方法論を取り入れるためにも日本国内の他学会からも招待するのが良いと思います。しかし学会として、そこまで方向付けをしてやるというのもお節介な話かもしれませんが。また、今回のような口演発表形式だと、その枠に入らない研究の中にも今後の潮流を作る研究や生命現象の多様性を理解するための素晴らしい研究があるにも関わらず、それらに対してもますます排他的になってくるのではないのでしょうか。

思いついたことを並べただけで散文となってしまいました。最後に、今回の学会運営にご尽力くださった諸先生方に心からお礼を申し上げて筆を置きたいと思います。

2000年度 日本発生生物学会運営委員会 議事録

日時：2000年5月24日（水曜日） 17:00～19:00

場所：高知会館3F、弥生の間

出席者：竹市 雅俊(会長)

相沢 慎一、井出 宏之、上野 直人、笹井 芳樹、佐藤 矩行、高橋 淑子、

中辻 憲夫、仲村 春和、西田 宏記、藤澤 肇、八杉 貞雄（運営委員）

浅島 誠（DGD編集主幹、運営委員兼務）

川村 和夫（第33回大会準備委員長）

富永 明（会計監査員）

出口 竜作、田村 宏治（事務局）

議題：

報告事項

1. 会長挨拶（竹市会長）

2. 大会委員長挨拶（川村大会準備委員長）

・登録について

449名の事前エントリーがあった。

発表演題数347題(昨年311題)

インターネットでの登録を重視した。 HP登録 249件

メール 24件

用紙 70件

その他 5件

入力の手間などにより手間どうなどの声があり、改善の必要も考える。

インターネット登録に関するアンケートの実施。

・シンポジウム

新しい試みとして、シンポジウム形式による発表を実施。

初めてのことが順調に準備が行われた。

3. 庶務報告（事務局）

・会員数(2000年5月現在)

国内 正会員 1075名

学生会員 395名

賛助会員 3社

海外 正会員 46名

合計 1519名（前年同期より36人増）

・研究助成結果

——東レ科学技術研究助成に関する審査の結果、以下の方に助成金が決定した。

京都大学ウイルス研究所教授 上村 匡

国立遺伝学研究所教授 武田 洋幸

——日産学術研究助成に関する審査の結果、以下の方に助成金が決定した。

国立遺伝学研究所教授 武田 洋幸

東北大学大学院理学研究科助教授 田村 宏治

・財団助成金推薦者の審査報告

山田財団研究助成に関して、発生生物学会からの推薦を行った。2件の推薦枠に対して4件の応募が会員からあったので、1月の運営委員会で決定されたとおり、会長の推薦により運営委員の中から3名の審査員が推挙された。点数制で3名の審査員が4件の応募内容を審査し、それをもとに会長が最終決定を行い、2件を発生生物学会から推薦した。

・安増郁夫元発生生物学会会長の逝去に伴い、発生生物学会から献花を行った。

4. DGD編集会議からの報告（浅島編集主幹）

・DGDの年9回発行に向けて準備中。

・DGDのon line化に向けて検討中。Blackwell社との協議を重ねている。

・DGDのimpact factorは確実にあがっているので、是非、皆さんに良い論文を投稿してもらいたい。

5. 学術会議報告（星学術会議委員欠席のため浅島委員から）

・日本の大学等における研究改善が最力点項目として審議されている。

・科研費の項目について

複合領域、発生生物学細目では第1段階審査員は発生生物、動物、植物、の各学会から3：2：1の比率で推薦、第2段階審査員は同数ずつ推薦する。

・平成13年度(本年秋申請分)より”生物多様性”が科研費時限付き細目として実現する可能性が非常に高くなった。発生生物学会も推進申請学会となっていることから、会員からの積極的な申請をお願いしたい。

6. 第34回日本発生生物学会・ISDB合同大会準備委員会報告（竹市大会準備委員長）

・4月下旬から招待講演者にinvitation letterを送るなどの準備が進んでいる。被招待国や分野などを考慮して調整を行っている。

・宣伝活動として・・・HP上での2ndサーキュラーの準備。ポスター配布、International Journal(Development, D.B.など)への広告を進めている。

・募金活動も引き続き行っている。

7. 生物科学学会連合に関する報告(井出幹事長)

- ・動物実験環境の改善について、立法化も含めて議論されている。
- ・公務員採用試験に関して、生物関係の採用が少ないことに関する議論が行われた。

8. ホームページ委員会から(阿形HP委員)

- ・HP上での学会発表申込みに関する反省

会員番号の問題・・・次回から改善する。会員名簿に会員番号を掲載する。

どのくらいの人数がHP申込みをする意思があるか追跡調査（アンケート）

HP上での要旨公開の時期の問題・・・引き続きの検討問題とする

- ・ISDBの準備

2ndサーキュラーの準備が順調に進んでいる。

エントリー(Registration)システムは東大のシステムを参考に作成、10月頃から開始、1月半ば締切、を予定。

- ・HPリンクの問題

これに関して、掲載記事の範疇(どのような募集広告まで載せるかなど)と共にHP委員会の中で協議していく。

審議事項

1. 1998年度決算と1999年度予算について（事務局、富永会計監査委員）

- ・1998年度決算（別紙1）、会計監査が報告され、承認された。
- ・1999年度予算案（別紙2）が承認された。

2. 細胞生物学会との合同年会について

- ・竹市会長から細胞生物学会との今までの協議に関して報告があり、2002年・東京周辺での開催を目指すことが了承された。
- ・関東地方を中心とした広い協力が必要という認識のもと、開催地や大会準備委員の決定などを進めていくこととした。

3. 総会議案が承認された。

4. DGDのオンライン化について

- ・1年間の無料openと会員には常に無料でopenをすることを前提にオンライン化を目指すことが承認された。

(別紙1) 1999年度 決算

<一般会計>

収入費目	金額(円)	支出費目	金額(円)
学会費	12,576,500	D G D刊行費	6,691,964
賛助会費	330,000	D G D編集費	1,700,000
文部省補助金	5,890,000	学会事務センター業務委託費	1,892,808
広告代	195,000	発送費	853,600
利息	6,766	D G D保管費	18,900
学協会著作権協議会分配	162,742	サーキュラー印刷費	800,755
出版著作権協議会分配	65,000	要旨集印刷・発送費	1,122,450
バックナンバー売り上げ	14,400	大会援助費	500,000
1998年度からの繰越	4,571,694	ホームページ開設・維持費	423,150
		ホームページ委員会経費	56,300
		運営委員会経費	388,641
		事務局経費	346,658
		特別会計	4,000,000
		2000年度への繰越	5,016,876
合計	23,812,102	合計	23,812,102

<特別会計>

金額(円)	備 考
11,000,000	1998年度からの繰越
4,000,000	1999年度 一般会計より
15,000,000	合計

(別紙2) 2000年度 予算

<一般会計>

収入費目	金額(円)
学会費	12,000,000
賛助会費	300,000
文部省補助金	5,900,000
広告代	150,000
雑収入	150,000
利息	5,000
1999年度からの繰越	5,016,876
合計	23,521,876

支出費目	金額(円)
D G D刊行費	
印刷費・発	7,000,000
編集費	2,000,000
保管料	20,000
サーキュラー刊行費	
印刷費	900,000
発送費	900,000
大会関係費	
大会補助金	500,000
印刷費	1,000,000
発送費	200,000
ホームページ関係費	
維持費	300,000
旅費	100,000
会議費	20,000
運営委員会経費	
旅費	800,000
会議費	30,000
総務費	
通信費	300,000
印刷費	50,000
旅費	50,000
人件費	400,000
雑費	200,000
業務委託費	2,100,000
名簿作成費	2,000,000
選挙関係費	500,000
予備費	4,151,876
合計	23,521,876

<特別会計>

金額(円)	備 考
15,000,000	1999年度からの繰越

第33回 日本発生生物学会総会議事録

日時：2000年5月26日

場所：高知県民文化ホール(グリーン会場)

議長選出(井出)：

会場から中内光昭会員が推薦され、満場一致で同会員を議長に選出した。

報告事項

1. 会長挨拶 (竹市会長)

2. 大会委員長挨拶(川村大会準備委員長)

- ・HP投稿を今年も行った。順調に準備は進んだが、いくつか不都合な点もあり、今後の検討課題となる。
- ・総演題数 348件(うち、1件発表取り消し)
- ・ホームページ投稿 249件(うち、1件発表取り消し)
- ・メール投稿 29件
- ・用紙投稿 70件
- ・シンポジウム希望 93件
- ・ポスター希望 254件
- ・当日参加者が、予想以上に多かった。
- ・シンプルな大会を目指し、一般公募を含むシンポジウムとポスターの2本柱を企画した。初めての試みだったが、スムーズに準備が進んだ。

3. 庶務報告(事務局)

- ・会員数(2000年5月現在)

国内 正会員 1075名

学生会員 395名

賛助会員 3社

海外 正会員 46名

合計 1519名(前年同期より36人増)

- ・研究助成結果

——東レ科学技術研究助成に関する審査結果

京都大学ウイルス研究所教授 上 村 匡

国立遺伝学研究所教授 武 田 洋 幸

——日産学術研究助成に関する審査結果

国立遺伝学研究所教授 武 田 洋 幸

東北大学大学院理学研究科助教授 田 村 宏 治

- ・財団助成金推薦者の審査報告
- ・安増郁夫元発生生物学会会長の逝去に伴う発生生物学会からの献花

4. DGD編集会議からの報告（浅島編集主幹）

- ・DGDの年9回発行に向けて準備中である。できるだけ早く実現したい。
- ・DGDのon line化に向けて引き続き検討中。Blackwell社との協議を重ねている。On line化の仕方(価格、会員にはどうするか)なども検討中。運営委員会です承を得た。
- ・DGDのimpact factorは確実に上がっているので、是非、皆さんに良い論文を投稿してもらいたい。

5. 学術会議報告（星学術会議委員欠席のため浅島委員から）

学術会議報告資料の配布の後、

- ・日本の大学等における研究改善が、最力点項目として審議されている。その内容を参考資料として配布。
- ・科研費の項目について、以下のことが決定された。
複合領域、発生生物学細目では第1段階審査員は発生生物、動物、植物、の各学会から3：2：1の比率で推薦、第2段階審査員は同数ずつ推薦する。
- ・平成13年度(本年秋申請分)より”生物多様性”が科研費時限付き細目として実現する可能性が非常に高くなった。発生生物学会も推進申請学会となっていることから、会員からの積極的な申請をお願いしたい。

6. 第34回日本発生生物学会・ISDB合同大会準備委員長からの挨拶（竹市大会準備委員長）

- ・4月下旬から招待講演者にinvitation letterを送るなどの準備が進んでいる。まだ被招待国や分野などを考慮して調整を行っている。
- ・宣伝活動として・・・HP上での2ndサーキュラーの準備。ポスター配布、International Journal(Development, D.B.など)への広告を進めている。会員の皆さんにも広く宣伝していただきたい。
- ・募金活動も引き続き行っていく。

7. ホームページ委員会報告(阿形HP委員)

・HP上での学会発表申込みに関する反省

会員番号の問題・・・次回から改善して、すべての会員番号を入力せずとも先に進めるようにする。会員名簿に会員番号を掲載する。

どのくらいの人数がHP上での申込をする意思があるか追跡調査

・・・→アンケート実施中(後日報告)

HP上での要旨公開の時期の問題・・・引き続きの検討問題とする

・ISDBの準備

2ndサーキュラーの準備が順調に進んでいる。

エントリー(Registration)システムは東大のシステムを参考に作成、10月頃から開始、1月半ば締切、を予定。今回の大会の反省を活かし、よりスムーズな申込を可能とするよう努力する。

・HPリンクの問題

これに関して、掲載記事の範疇(どのような募集広告まで載せるかなど)とともにHP委員会の中で協議していく。

・会場の出席会員から、HP委員の負担が大きすぎるのではないか、特に各大会のHP投稿に関しては、それぞれの大会準備委員会に任せるべきではないかという意見が出され、今後の大きな課題として検討していくこととされた。

審議事項

1. 1998年度決算(事務局、若松会計監査委員)

1998年度決算(別紙1)、会計監査が報告され、承認された。

2. 1999年度予算(事務局)

1999年度予算案(別紙2)が承認された。

3. その他

・細胞生物学会との合同年会について

竹市会長から2002年・東京周辺での開催を目指すことを含めた細胞生物学会との今までの協議に関して報告があった。これをもとに関東地方を中心とした広い協力が必要という認識のもと、開催地や大会準備委員の決定などを進めていくことが承認された。

学術会議第4部会員から会員の皆さんへのメッセージ

星 元 紀

先般の学術会議で、かねより動研連等が提案し、第4部より推薦されていた「生物多様性」が、科研費時限つき分化細目として13年度より発足する旨の報告があった。発生生物学学会会員からの多数の応募を期待している。

東京大学大学院理学系研究科 生物科学専攻動物科学講座教官公募

1. 公募人員： 教授2名
2. 専門分野： 1) 動物を用いた広い意味での発生生物学
2) 動物を用いた広い意味での細胞生物学
3. 公募資格： 博士の学位を有し、教育・研究への熱意と優れた業績を有する方
50才以下の方が望ましい
4. 着任時期： 平成13年4月1日（予定）
5. 提出書類： 1) 履歴書1通
2) 業績目録1通
3) 主要論文10編の別刷、各1部（コピー可）
4) 現在までの研究概要（2000字以内）1通
5) 今後の研究及び教育に関する抱負（2000字以内）1通
6) 推薦書1通（あるいは応募者に関して意見を伺える方2名の氏名と連絡先）
6. 応募期限： 平成12年9月20日（水）消印有効
7. 書類提出先及び問い合わせ先：

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院理学研究科生物科学専攻

神谷 律

電 話 03-5841-4426

FAX 03-5800-6842

kamiyar@biol.s.u-tokyo.ac.jp

8. その他：封筒の表に「発生生物学分野応募書類在中」あるいは「細胞生物学分野応募書類在中」と朱記し、書留または簡易書留で郵送してください。なお、特にお申し出の無い場合は、応募書類は返却いたしません。

理化学研究所 発生・再生科学総合研究センターチームリーダー公募

理化学研究所は2000年4月に「発生・再生科学総合研究センター」を発足させました。このセンターは、発生生物学の新たな展開を目指した基礎研究を推進するとともに、細胞治療・組織再生など医学的応用を促進するための基礎的・モデル的研究を推進し、得られる成果を広く応用分野に向けて発信することを目的としております。このような課題を遂行する研究チームリーダーを募集します。

採用予定人員：最大20名程度

受け入れ機関：理化学研究所（発生・再生科学総合研究センター）

募集分野：動物の発生・再生研究、発生の分子細胞生物学的研究、神経発生学、幹細胞および組織再生研究、進化発生学、ポストゲノム発生研究など広範囲な分野。新分野の開拓につながる斬新で創造的な研究の提案を歓迎します。

応募資格：上記分野の課題を遂行し、5～8名程度の研究員を擁する研究チームを統率できる能力を有する者。国籍不問。

契約期間：5年（1年契約で毎年更新）。それ以降については研究成果に基づき更新が可能性です。

応募方法：次の1)から4)の書類をそろえて下記連絡先まで送付してください。

- 1) 履歴書
- 2) 業績リスト
- 3) 発生・再生科学総合研究センターにおける具体的な研究計画（英文2000語程度）
- 4) 推薦者3名（氏名、連絡先）

応募締切： 2000年8月31日（木）必着

勤務地：当面、神戸市周辺のレンタルラボで研究実施。平成13年春には神戸市ポートアイランド内に一部の研究施設が完成するため、一部研究実施可能。平成14年春には神戸市ポートアイランド内に研究施設が完成するためすべての研究を同地で実施。

書類送付・問い合わせ先：

〒305-0074

茨城県つくば市高野台3-1-1 理化学研究所 筑波研究所 研究推進部 会沢、今井

TEL：0298-36-9000、9029 FAX：0298-36-9100

E-mail：aizawa@postman.riken.go.jp、imai@rtc.riken.go.jp

詳しくは理研ホームページを参照下さい。http://www.riken.go.jp

また、Nature誌7月6日号に掲載した英文公募もご参照下さい。

第9回(平成12年度)木原記念財団学術賞候補者の推薦について

〔推薦の対象〕

1. 推薦の対象は、最近において生命科学の分野で優れた独創的研究を行っている国内の研究者で、50才以下（9月30日締切日現在）の者としてします。
ただし、推薦の研究課題で他の著名な賞を受けていないこととします。

〔推薦の依頼先〕

2. 推薦は生命科学に関する学会等に依頼しています。

〔推薦の方法〕

3. 推薦者は学会の代表者等とし、1推薦者からの推薦は原則として1件とします。
(2) 推薦は所定の推薦書に必要事項を記入し、学会事務局(東北大内)まで郵送にてお送りください。(推薦書要旨は事務局にもございます。お問い合わせください。)
(3) 推薦の締切日は平成12年8月30日(財団締切のひと月前)とします。

〔推薦方法及び結果〕

4. 受賞者は、当財団の選考委員会で候補者を選考し、理事会にて決定します。
 - (2) 選考結果は推薦者及び受賞決定者に通知します。
 - (3) 選考結果は公表します。

〔木原記念財団学術賞の内容〕

5. 本賞は毎年原則として1件に贈呈します。
 - (2) 本賞は賞状、記念牌及び賞金200万円を贈呈します。

財団法人 ブレインサイエンス振興財団 第15回研究助成候補者推薦要領

1. 趣旨

ブレインサイエンス研究分野において、独創的で国際的評価に値する研究を助成する。研究分野は、脳神経に関する実験研究のみならず理論・モデリング研究をも含む。候補者は、単独であっても、また共同研究であってもよいが、なるべく若い研究者の推薦を希望する。

2. 研究助成金

助成額は1件80万円、助成件数は8件とする。

3. 推薦者

- (1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。
- (2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

当財団の理事および評議員よりの推薦については、1推薦者から1件に限る。

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、学会事務局(東北大内)まで郵送にてお送りください。
(推薦書要旨は事務局にもございます。お問い合わせください。)

6. 推薦締切日

平成12年10月27日(財団締切のひと月前)とする。

7. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

8. 採否の通知

平成13年3月末日までに推薦者あて、採否を通知する。

9. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成13年6月末までに研究助成金を送呈する。

10. 助成金の使途

助成金は、推薦書記載の通り使用することを原則とする。なお、経理報告書を平成14年4月中に提出すること。

11. 成果の報告

研究の成果については、平成14年4月中に成果報告を当財団に提出するものとする。また、財団主催の研究会において発表を御願います。助成金による研究を専門誌に発表する場合には、“財団法人ブレインサイエンス振興財団（英文の場合は、Brain Science Foundation）の助成による”旨を書き添えること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104-0028 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電話（03）3273-2565（直通）

財団法人 ブレインサイエンス振興財団 第14回海外派遣研究助成候補者推薦要領

1. 趣旨

我が国におけるブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間（6ヶ月以内）の共同研究のための研究者の海外派遣を助成する。

ただし、平成13年4月から平成14年3月までの間に出発出来るものに限る。

2. 助成予定額

1件あたりの助成額は、往復の航空運賃を主とし、30万円までを限度として必要額を若干件助成する。

3. 推薦者

(1) 関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

当財団の理事および評議員よりの推薦については、1 推薦者から 1 件に限る。

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、学会事務局(東北大内)まで郵送にてお送りください。

(推薦書要旨は事務局にもございます。お問い合わせください。)

6. 推薦締切日

平成12年12月17日(財団締切のひと月前)とする。

7. 受入先の承諾書

受入先の承諾書(学会、シンポジウム等参加の場合は、参加証明書または招待状の写を、短期の共同研究の場合は、受入機関または共同研究者の手紙の写)を添付すること。

8. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

9. 採否の通知

平成13年3月末日までに推薦者あて採否を通知する。

10. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成13年4月以降に出発時期に応じて送呈する。

11. 助成金の使途

助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。

12. 成果の報告

帰国後2ヶ月以内に派遣の成果について、報告書を当財団に提出すること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104-0028 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電話(03)3273-2565(直通)

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

第14回海外研究者招聘助成候補者推薦要領

1. 趣旨

ブレインサイエンス研究分野において、独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の短期間（3ヶ月以内）の招聘を助成する。

ただし、助成金は、外国人研究者を招聘する受入責任者に交付する。

2. 招聘の時期

平成13年4月1日から平成14年3月31日の間に外国の研究者を招聘するもの。

3. 助成予定額

1件あたりの助成額は、往復の航空運賃を主とし、30万円までを限度として必要額を若干件助成する。

4. 推薦者

(1) 関係各学会代表責任者または受入責任者の所属機関の長とする。

(2) 当財団の理事および評議員とする。

5. 推薦件数

当財団の理事および評議員よりの推薦については、1推薦者から1件に限る。

6. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、学会事務局(東北大内)まで郵送にてお送りください。

(推薦書要旨は事務局にもございます。お問い合わせください。)

7. 推薦締切日

平成12年12月17日(財団締切のひと月前)とする。

8. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

9. 採否の通知

平成13年3月末日までに推薦者あて採否を通知する。

10. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成13年4月から必要に応じて受入責任者に送呈する。

11. 助成金の使途

外国人研究者招聘助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。

12. 成果の報告

招聘の成果について、招聘後2ヶ月以内に受入責任者より報告書を当財団に提出すること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104-0028 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電話 (03) 3273-2565 (直通)

財団法人 ブレインサイエンス振興財団 第15回塚原仲晃記念賞受賞候補者推薦要領

1. 趣旨

生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている45歳以下の研究者（国内外を問わない）に対して塚原仲晃記念賞を贈呈する

2. 褒賞金

贈呈件数は原則として1件とし、賞牌ならびに副賞（100万円）を贈呈する。

3. 推薦者

（1）関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。

（2）当財団の理事および評議員とする。

4. 推薦件数

当財団の理事および評議員よりの推薦については、1推薦者から1件に限る。

5. 推薦方法

所定の用紙に必要事項を記入し、学会事務局(東北大内)まで郵送にてお送りください。

(推薦書要旨は事務局にもございます。お問い合わせください。)

6. 推薦締切日

平成12年10月27日（財団締切のひと月前）とする。

7. 選考の方法

選考委員会において選考し、理事会において決定する。

8. 選考結果の通知

平成13年3月末日までに推薦者および受賞あて通知する。

9. 塚原仲晃記念賞の贈呈 その他

贈呈決定者に対して、別途通知する。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒104-0028 東京都中央区八重洲2丁目6番20号

電話 (03) 3273-2565 (直通)

第32回(平成12年度)内藤記念科学振興賞受賞候補者の推薦要領

1. テーマおよび候補者

- (1) 人類の健康の増進に寄与し得る自然科学の基礎研究、なかなずく疾病の予防と治療に関する独創的テーマに取り組み、自然科学の進歩発展に顕著な功績を挙げた研究者。
- (2) 主たる研究者は原則として単独とするが、異なる研究グループによる共同研究の場合には、連名であってもよい。この場合は、その旨を推薦書に明記していただきたい。
- (3) 候補者の再度の推薦も差しつかえない。

2. ほう賞の金額

第32回(平成12年度)内藤記念科学振興賞(ほう賞)は、1件とし、正賞・金メダルならびに副賞・300万円を贈呈する。

3. 推薦方法

推薦は所定の推薦書に必要事項を記入し、学会事務局(東北大内)まで郵送にてお送りください。(推薦書要旨は事務局にもございます。お問い合わせください。)

4. 推薦書の締切日

平成12年9月10日(財団締切のひと月前)必着とする。

5. 選考の方法

当財団の選考委員会において平成12年12月下旬に選考し、評議員会の同意を求め理事会で決定する。

6. 受賞者決定の報告

平成13年2月上旬に推薦者あて採否を報告する。

7. ほう賞の贈呈

ほう賞決定者にたいしては平成13年3月上旬に内藤記念科学振興賞を贈呈する。

8. ほう賞の使途

ほう賞金の使途にたいしては条件をつけない。

9. 本賞の英文名

The Naito Foundation Research Prize for 2000 とする。

10. 付記

このほう賞金品(内藤記念科学振興賞)は、昭和49年大蔵省告示第61号により、非課税とされています。

財団法人 内藤記念科学振興財団

113-0033 東京都文京区本郷3丁目42番6号、NKDビル8階

電話 (03) 3813-3005 ファックス (03) 3811-2917

E-mail info@naito-f.or.jp URL <http://www.naito-f.or.jp>

第32回（平成12年度前期・後期） 内藤記念海外学者招へい助成金の推薦要領

1. テーマおよび候補者

人類の健康の増進に寄与し得る自然科学の基礎研究、なかんずく疾病の予防と治療に関する独創的テーマに意欲的に取り組み、国際的に高い評価を得ている外国の研究者。ただし、助成金はその外国の研究者を招へいする受け入れ責任者に贈呈するものとする。

2. 招へいの時期

前期……平成12年10月1日～平成13年9月30日の間に外国の研究者を招へいするもの。

後期……平成13年4月1日～平成14年3月31日の間に外国の研究者を招へいするもの。

3. 予算および助成額

(1) 本年度の海外学者招へい助成金の予算は前期・後期とも500万円が計上されている。

(2) 1件は往復の航空料金または滞在費として50万円までとする。

4. 推薦者

(1) 総合大学の学部においては学部長、大学院においては研究科長、研究所においては研究所長とし、単科大学においては学長とする。大学以外の場合には、当財団の理事会が承認した研究機関の代表責任者とする。

(2) 当財団の理事会が定めた27学会の代表者とする。

(3) 当財団の役員および評議員とする。

5. 推薦件数

前期・後期とも1推薦者から各1件に限る。

6. 推薦の方法

学会推薦を受ける場合、所定の推薦書に必要事項を記入し、学会事務局(東北大内)まで郵送にてお送りください。(推薦書要旨は事務局にもございます。お問い合わせください。)

7. 推薦締切日(学会から推薦を受ける場合の学会締切)

前期……平成12年6月10日、後期……平成12年9月10日(財団締切のひと月前)必着とします。(締切日が早くなったためご注意ください)

選考の方法

当財団の選考委員会において平成12年9月上旬、並びに平成12年12月下旬に選考し、評議員会の同意を求め、理事会で決定する。同一の学会等に招へいする候補が複数申請された場合には、採択は1件以内となる。

8. 採否の通知

前期は平成12年10月上旬に、後期は平成13年2月上旬に推薦者あて採否を報告する。

9. 助成金の交付

助成決定者に対しては、前期は平成12年10月下旬より、後期は平成13年2月下旬より、受入れ責任者に内藤記念海外学者招へい助成金を送呈する。なお、贈呈式は平成13年3月中旬に挙行するものとする。

10. 助成金の使途

外国人研究者招へいの助成金は、推薦書記載どおりに使用することを原則とする。万一途中で使途を変更する場合には、その旨あらかじめ申し出て当財団の承認を求めること。

11. 結果の報告

この助成金には特別の条件はつけないが、その結果について受入れ責任者より報告書を当財団に提出していただきたい。

12. 成果の刊行

成果について刊行する場合には、“財団法人内藤記念科学振興財団（英文の場合はThe Naito Foundation）の助成による”旨を明記して下さい。

13. 招へい研究者の来日が中止になった場合の扱いについて

招へい研究者の来日が中止になった場合は、原則として助成金を辞退していただくこととなり、代理の研究者の招へい費用に充当してはならない。なお、来日が延期になった場合は、すみやかにその旨の連絡をし、当財団の承認を求めること。

財団法人 内藤記念科学振興財団

113-0033 東京都文京区本郷3丁目42番6号、NKDビル8階

電話(03)3813-3005、 ファックス (03)3811-2917

E-mail info@naito-f.or.jp URL <http://www.naito-f.or.jp>

第32回内藤記念研究成果刊行助成金候補者（学術図書） の推薦要領

1. 助成対象

- (1) 人類の健康の増進に寄与し得る自然科学の基礎的研究、なかんずく疾病の予防と治療に関する自らの研究成果を中心とした英文の学術図書を主たる対象とする。なお、医史学・薬史学および薬用植物に関するものは邦文でもよい。
- (2) 著者は一人でも複数でもよいが、主たる著者名で申請すること。
- (3) 下記に該当するものは、対象外とする。

*学会誌への投稿補助 *雑誌の臨時増刊号 *退官記念業績集 *シンポジウムのプロシーディングス *大学・研究所等の紀要 *外国語から日本語への翻訳書

2. 予算および助成額

本年度は500万円の予算を計上しているが、その内訳は学術図書の刊行に200万円、定期刊行物（学術雑誌）の刊行に300万円（新規分）を配分する。なお、学術図書に対する1件当たり助成額は、100万円以内とする。

3. 推薦者

- (1) 総合大学の学部においては学部長、大学院においては研究科長、研究所においては研究所長とし、単科大学においては学長とする。
- (2) 当財団の役員および評議員とする。
- (3) 学協会の代表者および出版者の推薦でもよい。

4. 推薦件数

1推薦者から1件に限る。

5. 推薦方法

学会推薦を受ける場合、所定の推薦書に必要事項を記入し、学会事務局(東北大内)まで郵送にてお送りください。(推薦書要旨は事務局にもございます。お問い合わせください。)

6. 推薦締切日(学会から推薦を受ける場合の学会締切)

平成12年9月10日（財団締切のひと月前）必着とします。（締切日が早くなったためご注意ください）

7. 選考の方法

当財団の選考委員会において平成12年12月下旬に選考し、評議員会の同意を求め、理事会で決定する。

8. 採否の通知

平成13年2月中旬までに推薦者あて採否を報告する。

9. 助成金の交付

助成決定者に対しては、平成13年2月中旬～3月中旬に内藤記念研究成果刊行助成金を送呈する。ただし、これらの贈呈式は平成13年3月中旬に挙行するものとする。

10. 助成金の使途

研究成果刊行助成金は、推薦書記載どおりに使用することを原則とする。万一途中で使途を変更する場合には、その旨あらかじめ申し出て当財団の承認を求めること。

11. 刊行条件および報告

対象となる刊行物のコピーライト頁に、“財団法人内藤記念科学振興財団（英文の場合はThe Naito Foundation）の助成による”旨を明記するとともに、その刊行書を2冊当財団に寄贈していただきたい。

12. 刊行の期限

学術図書及びこれから創刊する定期刊行物については、原則として助成金交付後12～18ヶ月以内に刊行すること。

財団法人 内藤記念科学振興財団

113-0033 東京都文京区本郷3丁目42番6号、NKDビル8階

電話 (03) 3813-3005、 ファックス (03) 3811-2917

E-mail info@naito-f.or.jp URL http://www.naito-f.or.jp

平成12年度（第22回）沖縄研究奨励賞推薦について

1. 推薦応募開始 平成12年7月15日

2. 推薦応募締切 学会から推薦を受ける場合、平成12年8月30日

(財団締切のひと月前) 学会事務局(東北大内)必着

3. 記者発表 平成12年12月11日

4. 贈呈式、受賞記念講演及び祝賀会

平成13年1月18日（那覇市内のパシフィックホテル沖縄で開催）

[お問い合わせ先]

〒100-0013 東京都千代田区霞が関3-6-15 グローリアビル7F

(財) 沖縄協会「沖縄研究奨励賞」担当 石坂次郎

TEL: 03-3580-0641, FAX: 03-3597-5854

ホームページ <http://village.infoweb.ne.jp/fvgm0090/>

E-mail fvgm0090@mb.infoweb.ne.jp

沖縄研究奨励賞規則

(目的)

第1条 沖縄の地域振興及び学術振興に貢献する人材を発掘し、育成するため、財団法人沖縄協会沖縄研究奨励賞(以下「奨励賞」という。)を設ける。

(対象)

第2条 奨励賞は、沖縄を対象とした将来性豊かな優れた研究(自然科学, 人文科学又は社会科学)を行っている50歳以下(7月15日現在)の新進研究者(又はグループ)3名以内に贈る。

(表彰)

第3条 受賞者には、奨励賞として本賞並びに副賞として研究助成金50万円を贈り表彰する。

(選考委員)

第4条 財団法人沖縄協会会長(以下「会長」という。)は、学識経験者の中から奨励賞選考委員(以下「委員」という。)若干名を委嘱する。

2 委員は、選考委員会(以下「委員会」という。)を構成し、当該年度の受賞候補者を選考する。

(選考委員会)

第5条 委員会は、年1回以上会長が招集する。

2 選考委員会には委員長を置く。

3 委員長は、委員の互選により選任し、委員会の議長を務める

4 委員会は、当該年度の受賞候補者を決定し、会長に推薦する。

5 委員会のもとに専門委員若干名を置くことができる。

6 委員会に東京地区委員長及び沖縄地区委員長(以下「地区委員長」という。)を置くことができる。

7 地区委員長は、各地区に所属する委員の中から会長が委嘱し、必要に応じて開催

する小委員会の議長を務める。

(候補者)

第6条 奨励賞に応募する資格を有する者は、第2条に定める対象に該当し、且つ学会、研究機関若しくは大学又は実績のある研究者から推薦を受けた新進研究者又はグループ（以下「候補者」という。）とする。

- 2 候補者がグループの場合は、1グループを1名とみなす。このとき代表者1名を決めなければならない。
- 3 前項のグループ構成員は、全員が50歳以下(7月15日現在)でなければならない。
- 4 候補者の出身地及び国籍は問わないものとする。

(応募方法)

第7条 候補者又は前条第1項により候補者を推薦する者(以下「推薦者」という。)は、別紙「沖縄研究奨励賞推薦応募用紙」(以下「応募書類」という。)に所要事項を記入するものとする。

- 2 候補者がグループの場合は、次により応募書類に記入する。
 - (1) 「候補者」の欄にグループ名及び代表者名を記入する。ただし、グループ名を持たない場合は、構成員全員の氏名を記入し、且つ代表者を明記する。
 - (2) 「略歴」の欄にグループの代表者の略歴を記入し、そのほかのメンバーの略歴は、A4判に横書きで作成し、別紙として応募書類に添付する。
- 3 研究は、継続中のものでも応募の対象となる。
- 4 候補者又は推薦者(以下「候補者等」という。)は、第1項の応募書類のほか次に掲げる選考書類を提出しなければならない。
 - (1) 研究成果物(研究論文3編以内。著書がある場合1冊。)
 - (2) 前号により提出する研究成果物の簡潔な要旨(それぞれA4判横書き 1,000字以内)。ただし、研究成果物にすでに要旨(摘要、アブストラクト、サマリー等)が付いている場合には、これをA4判に複写し提出することができる。
 - (3) 主な研究業績の目録(著書、論文等30点以内)。ただし、第1号により提出する研究成果物には○印を付すものとする。(グループで応募する場合は、構成員それぞれのものを提出する。)
- 5 選考書類は、返却することができない。ただし、再度の応募に当たっては、著書に限り以前に提出したものを利用することができる。
- 6 候補者の研究分野(自然科学、人文科学又は社会科学の別)は、候補者等においてこれを明示するものとする。この場合、研究内容が複数の分野に亘るときは、複数分野を指示することができる。

7 応募書類及び選考書類の提出は、郵送によるものとする。

(日程)

第8条 奨励賞の推薦は、原則として毎年7月15日に応募を開始し、9月30日(当日消印を有効とする。)に締め切り、12月に当該年度の受賞者を決定し、翌年1月に贈呈式並びに受賞者記念講演を行うものとする。

選考委員名簿(50音順、敬称略)

- * 阿部 統 (東京工業大学名誉教授)
- 井上邦雄 (沖縄協会専務理事)
- 大鶴正満 (琉球大学名誉教授)
- 垣花秀武 (亜熱帯総合研究所理事長)
- 木崎甲子郎 (琉球大学名誉教授)
- 清成忠男 (法政大学総長)
- 小島美子 (国立歴史民俗博物館名誉教授)
- † 小玉正任 (沖縄協会会長)
- 高宮廣衛 (沖縄国際大学教授)
- ** 高良鉄夫 (琉球大学名誉教授)
- 比嘉照夫 (琉球大学教授)
- 外間守善 (沖縄学研究所所長)
- 宮里政玄 (元獨協大学教授)

† 委員長

* 東京地区委員長

** 沖縄地区委員長

平成12年度東レ科学技術賞および 東レ科学技術研究助成の候補者推薦

1. 科学技術賞候補者の取り扱いについて

平成11年度にご推薦いただき受賞に至らなかった候補者は、自動的に平成12年度の選考の対象にいたしますので、今回推薦書を再度ご提出いただく必要はありません。ただし、この1年間に推薦書の内容に追加すべき顕著な業績または発表や受賞があった場合は、平成11年度の推薦書（Copy）に加筆して再度お送り下さい。

いずれの場合も平成12年度の候補者推薦件数の外数としていただいて結構です。

2. 科学技術研究助成候補者の推薦について

研究助成の対象者は、「国内の研究機関において、独創的、萌芽的研究を活発に行っており、かつ本人が主体性を持って研究を遂行できる若手研究者」です。「若手」の範囲については学問分野により差があるため、年齢、職位などによる画一的な制限は設けておりませんが、第三セクターによる研究助成がもっとも効果的な研究を対象にしたいと考えております。候補者推薦の際にはこれらの趣旨を十分にご配慮くださるようお願いいたします。

3. 文献等の別刷の添付について

科学技術賞および研究助成の候補者推薦書には、文献等の別刷を2部ずつ添付してください。別刷を返却ご希望の場合は、予めその旨をお知らせ下さい。

第41回（平成12年度）東レ科学技術賞候補者推薦要領

1. 候補者の対象・・・貴学会に関する分野で、下記に該当するもの

- (1) 学術上の業績が顕著なもの
- (2) 学術上重要な発見をしたもの
- (3) 重要な発明をして、その効果が大きいもの
- (4) 上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献したもの

2. 科学技術賞・・・1件につき、賞状、金メダルおよび賞金500万円

(2件前後の予定)

3. 推薦者・・・・・・学協会の代表者および当会の推薦委員

4. 候補者推薦件数・・・1学協会から2件以内（平成11年のに推薦された候補者（注b.）は外数とします）および1推薦委員から一件以内

5. 推薦手続・・・・・・推薦は所定の推薦書に必要事項を記入し、学会事務局（東北大内）まで郵送にてお送りください。（推薦書要旨は事務局にもございます。お問い合わせください。）

6. 推薦締切期日・・・平成12年9月10日(財団締切のひと月前)とします。)
7. 選考方法・・・下記委員からなる選考委員会において選考し、評議員会において受賞者を決定します。
- 選考委員(委員長)宇井理生、猪瀬 博、山崎敏光
茅 幸二、潮田資勝、中西重忠、井上博允、
佐久間健人、浅島誠
8. 科学技術賞の贈呈・平成12年3月の予定

- (注) a. 候補者は、必ずしも貴会会員であることを要しません。また、貴会の関連領域にある候補者についてもご配慮願います。
- b. 推薦を受けた候補者は、その年度および次の年度にわたって選考の対象としております。したがって平成11年度に推薦された候補者については、平成12年度候補者として再度推薦の必要はありません。ただし、この1年間に以後において、追加すべき顕著な業績又は発表や受賞があった場合は、平成11年度推薦書(コピー)に加筆して当会あてご送付願います。
- c. 受賞者は、原則として1件1人とします。特に複数であることを必要とするときはそれらの研究者の寄与が同等であることを示して下さい。ただし、この場合でも1件として取り扱います。
- d. この科学技術賞は、所得税法(第9条第1項第13号二)の規定により非課税となっています。

第41回(平成12年度)東レ科学技術研究助成候補者推薦要領

1. 候補者の対象・・・貴学協会に関する分野で国内の研究機関において基礎的な研究に従事し、今後の研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる独創的、萌芽的研究を活発に行っている若手研究者
2. 研究助成金・・・総額1億3千万円。1件3千万円程度まで10件程度とします。
3. 推薦者・・・学協会の代表者および当会の推薦委員
4. 候補者推薦件数・・・1学協会から2件以内および1推薦委員から一件以内
5. 推薦手続・・・推薦は所定の推薦書に必要事項を記入し、学会事務局(東北大内)まで郵送にてお送りください。(推薦書要旨は事務局にもございます。お問い合わせください。)
6. 推薦締切期日・・・平成12年9月10日(財団締切のひと月前)とします。
7. 選考方法・・・下記委員からなる選考委員会において、提出された書類により一

次選考を行い、さらに面接による二次選考を経て、評議員会において決定します。なお、二次選考対象の代表研究者の方は、平成12年12月下旬に面接をさせていただきます。

選考委員 (委員長) 宇井理生、猪瀬 博、山崎敏光

茅 幸二、潮田資勝、中西重忠、井上博允、

佐久間健人、浅島誠

8. 科学技術賞の贈呈・平成13年3月の予定

- (注) a. 候補者は、必ずしも貴会会員であることを要しません。また、貴会の関連領域にある候補者についてもご配慮願います。
- e. 推薦を受けた候補者は、その年度および次の年度にわたって選考の対象としております。したがって平成11年度に推薦された候補者については、平成12年度候補者として再度推薦の必要はありません。ただし、この1年間に以後において、追加すべき顕著な業績又は発表や受賞があった場合は、平成11年度推薦書(コピー)に加筆して当会あてご送付願います。
- f. 受賞者は、原則として1件1人とします。特に複数であることを必要とするときはそれらの研究者の寄与が同等であることを示して下さい。ただし、この場合でも1件として取り扱います。
- g. この科学技術賞は、所得税法(第9条第1項第13号二)の規定により非課税となっています。

公益信託・團生物科学国際基金助成事業終了のお知らせ

当基金は、故團勝磨先生によって平成3年(1991年)6月に設定されました。

先生は海産動物の初期発生や細胞分裂などの分野で優れた業績をあげ、また東京都立大学教授、同学長、日本動物学会会長、日本発生生物学会会長、日本学士院会員、文化功労者などとして生物科学の発展に尽くされました。また、夫人の團ジーン先生は受精における先体反応の発見などの優れた業績をあげるとともに、お茶の水女子大学教授として学生の指導にあたられました。また、「原爆の子」の英訳 "Children of the A-Bomb" (1959年出版)など生物学以外の分野でも活躍されました。

当基金は発足以来、生物科学、特に團夫妻の研究と関係の深い発生生物学、細胞生物学の分野における研究者の国際的育成をはかり、生物科学の発展と国際交流の促進に寄与す

るために、現在までに16カ国79人の生物科学の研究者に助成事業を行って参りましたが、生前に、團先生が公益信託は適当な時期に終了したほうがよいとおっしゃっていたこともあり、設定10年目の本年度を持って当基金は終了させていただきます。これまで当基金にお寄せ頂きましたご厚情に対して、運営委員及び事務局一同、厚くお礼申し上げます。

なお平成12年度には下記の12名の方々が助成を受けることに決まりました。

氏名	所属	受入研究先
(長期国際共同研究) 皆川 純 笹土 降雄 笠井 文生	日本 日本 日本	Ohio State University (USA) Freiburg (Germany) University of Cambridge (UK)
(短期国際共同利用) 竹内 純 S.H.Inayat-Hussain	日本 マレーシア	Harverd Medical School (USA) 大阪大学
氏名	所属	国際研究集会開催地
(国際研究集会参加) V.Sperandio I.N.Okeke 鈴木 玲奈 西井 一郎 山本 歩 黒川 洵子 赤羽 悟美	ブラジル ナイジェリア 日本 日本 日本 日本 日本	京都 京都 Amsterdam, Netherlands Amsterdam, Netherlands New London, USA Milano, Italy Milano, Italy

以上

公益信託 團生物科学国際基金運営委員会
運営委員長 平本 幸男

事務局 〒103-8266 東京都中央区日本橋3-1-8
日本信託銀行株式会社
本店営業第一部営業第一グループ

第13回内藤コンファレンス 難病の分子生物学〔Ⅱ〕

会場： 湘南国際村センター（神奈川県三浦郡葉山町）

J R 逗子駅または京浜急行新逗子駅から京浜急行路線バス＜湘南国際村行き（逗 16 系統）＞利用で約 30 分、
タクシー利用で約 20 分

組織委員：（敬称略）○印は委員長

○金澤 一郎 東京大学大学院医学系研究科 教授

三森 経世 慶應義塾大学医学部 講師

森本 幾夫 東京大学医科学研究所 教授

山本 一彦 東京大学大学院医学系研究科 教授

祖父江 元 名古屋大学医学部 教授

山田 信博 筑波大学臨床医学系 教授

参加方法：当ホームページにある所定の申請書を用いて、E-Mailでお申し込みください。
組織委員会において選考し、約60名を招待いたします。（参加費不要、宿泊費・食事代は
当財団で負担、ただし交通費は実費）。なお選考にあたっては、下記の人を優先します。

- ◎ テーマ関連領域で活発に研究している人で、なるべく若い人
- ◎ 英語で討論ができる人
- ◎ 4日間を通じて出席出来る人
- ◎ ポスターでの発表ができる人

なお、発表者の中から、特定研究助成金の候補者を選出いたします。

（総額 1, 000 万円）

申込締切： 8月31日必着

セッション

特別講演：プリオン蛋白質における構造研究

A：トレランス（寛容）破綻と自己抗体

B：免疫制御と自己免疫病

C：リウマチ性疾患における病態関連遺伝子へのアプローチ

D：難病治療の分子標的（1）

E：難病治療の分子標的（2）

財団法人 内藤記念科学振興財団

113-0033 東京都文京区本郷3丁目42番6号、NKDビル8階

電話(03)3813-3005、 ファックス (03)3811-2917

E-mail info@naito-f.or.jp URL http://www.naito-f.or.jp

第17回 (財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団 公開シンポジウム 「糖尿病」ーその発症機構から予防までー

主催：(財) 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

後援(予定)：科学技術庁、厚生省、日本糖尿病学会、日本病態栄養学会

日時：平成12年10月21日(土) 13:00～18:00

場所：経団連会館ホール

オーガナイザー：

清野 裕 ：京都大学大学院医学研究科教授

春野 雅人 ：神戸大学医学部医学科教授

ープログラムー

挨拶 ：中村 寛之助(財団理事長)

講演

①イントロダクション：清野 裕

②吉川隆一(滋賀医科大学 第3内科)

「糖尿病勢性細小血管症の発症機構とその阻止」

③山田信博(筑波大学 臨床医学系)

「糖尿病における動脈硬化の発症機構とその予防」

④清野 裕

「日本人糖尿病におけるインスリン分泌の特徴」

⑤春野雅人

「インスリンシグナルリングとインスリン抵抗性」

⑥Gerald I. Shulman (School of Medicine, Yale University)

「Cellular mechanisms of insulin resistance」

⑦Domenico Accili (College of Physicians & Surgeons, Columbia University)

「Signal transduction in insulin action: lessons from transgenic and knockout mice」

⑧結び：春野雅人

⑨総合討論 司会：清野裕、春野雅人

参加方法：参加費無料。はがき又はFAXにて住所・氏名・所属・電話番号を明記のうえ、下記へお申し込み下さい。参加証をお送りいたします。但し、定員（420名）になり次第締め切ります。

申込締切：10月11日（水）

申込先：（財）加藤記念バイオサイエンス研究振興財団

〒194-8533 町田市旭町3-6-6

TEL 42-725-2576 FAX 042-722-8614

財団法人東レ科学振興会 第50回 科学講演会のご案内

“はじめに光ありき”といわれるように、光は人類の生活に深くかかわっています。今世紀最後の大発明である青色発光素子が、わが国で開発され、製品化されました。交通信号機や照明光源として普及しつつありますが、発光素子光源は、発光効率が高く、長寿命で、省エネルギーおよび省資源の観点から究極の光源といわれ、21世紀の照明は、白熱電球や蛍光灯から発光素子光源へおきかわることが予想されています。

青色発光素子は、それが着想されて20数年目の成果であるといわれていますが、その間、いかなる問題があり、どのようにして克服されたのか、また、青色発光素子を含む発光ダイオード、レーザーダイオード、集積回路のような現代の光・電子素子のほとんどが半導体結晶によって作られており、それなくしては、今日の情報化社会は実現しなかったと言えますが、完全結晶はいかにして実現できるのか、今回、この分野の研究を先導され、斯界の権威であられるお二人の先生をお招きして、最先端の内容を判りやすくお話しいただくこととしました。ご期待ください。

と き：平成12年9月20日（水） 開演18時00分～終演20時45分

ところ：有楽町朝日ホール（有楽町マリオン11階）

東京都千代田区有楽町2-5-1（JR有楽町駅前）

テーマ：今、材料研究が面白い

“青色発光素子はいかにして生れたか”

演題 1・講師：

(1) 青色発光素子を求めて

－窒化物半導体と完全結晶－

名古屋大学名誉教授

名城大学理工学部教授 赤崎 勇

(2) 完全結晶への挑戦

－結晶成長メカニズムの理解から欠陥を制御する－

東京大学名誉教授

名城大学理工学部教授 西永 頌

その他：・入場無料、予約なし。当日会場先着順（定員630名）

・ご来聴の方には、後日講演記録を進呈いたします。

問い合わせ先：財団法人 東レ科学振興会

〒279-8555 千葉県浦安市美浜 1-8-1

T E L (047) 350-6103・6104 F A X (047) 350-6082

E-mail JDP00117@nifty.ne.jp

事務局から

先日配布いたしました、運営委員選挙の投票用紙返送用の封筒に誤りがありました。
正しい返信先は、

仙台市青葉区荒巻字青葉

東北大学大学院 理学研究科生物学教室内

日本発生物学会

選挙管理委員会

松崎 文雄 行

です。配布されたままでも問題なく返送されますが、訂正してお詫びいたします。

会 員 異 動

<新入会員>

(氏名)	(所属)	(住所)	(①テーマ、②材料)
木村 透	大阪大学微生物病研究所 所遺伝子動態	〒565-0871 吹田市山田丘3-1	①生殖細胞・幹細胞 ②マウス
足立 直樹	国立公衆衛生院衛生薬学部	〒108-8638 港区白金台4-6-1	①遺伝子群の進化・相互作用 ②アフリカツメガエル他
谷口 弘樹	岡崎国立共同研究機構 基礎生物学研究所行動制御部門	〒444-8585 岡崎市明大寺町字西郷中38	①神経発生学 ②ラット
村上 安則	名古屋大学理学研究科 形態統御学講座神経発生生物学研究室	〒464-8602 名古屋市千種区不老町	①脊椎動物の神経回路形成 ②マウス
中村 輝	筑波大学生物科学系遺伝子実験センター	〒305-8572 つくば市天王台1-1-1	①生殖細胞の形成と分化 ②ショウジョウバエ
羽生賀津子	筑波大学生物科学系	〒305-8572 つくば市天王台1-1-1	①生殖細胞の形成・分化 ②ショウジョウバエ
長曾 秀幸	理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター	〒305-0074 つくば市高野台3-1-1	① ②ショウジョウバエ
諸熊 淳治	東京工業大学生命理工学部生体システム	〒226-8501 横浜市緑区長津田町4259	①初期発生における遺伝子発現 ②マホヤ
鈴木信太郎	愛知県心身障害者コロニー発達障害研究所発生学部門	〒480-0392 春日井市神屋町713-8	①組織形成 ②マウス・ラット
堀一大嶋沢子	東京工業大学生命理工学研究科岸本研究室	〒226-8501 横浜市緑区長津田町4259	①細胞周期制御 ②マホヤ・カタユウレイホヤ・ユウレイホヤ
田辺 康人	(財)大阪バイオサイエンス研究所	〒565-0874 吹田市古江台6-2-4	①神経多様性獲得機構 神経回路網形成機構 ②ニワトリ
(学)古島謙亮	熊本大学医学部附属遺伝発生研形態発生	〒860-0811 熊本市本荘2-2-1	①頭部誘導の分子機構 ②ハツカネズミ
(学)Rafols Ismael	東北大学電気通信研究所	〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1	①粘菌の発生 ②粘菌
(学)乙黒敬生	奈良先端科学技術大学院大学	〒630-0101 生駒市高山町8916-5	①rhombomereにおけるIrxfamilyの解析 ②ニワトリ
(学)川村哲規	早稲田大学大学院理工学研究科東中川研究室	〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1	①発生における決定機構 ②ゼブラフィッシュ・マウス

(学)宇佐美敦司	東京歯科大学解剖学講座	〒261-8502 千葉市美浜区真砂1-2-2	①筋肉の発生 ②ICRマウス
(学)神川真美	久留米大学先端癌治療研究センター細胞発生工学	〒830-0011 久留米市旭町67	①外性器形成過程におけるBmp遺伝子群の解析 ②マウス・ニワトリ
(学)江川智哉	福山大学工学研究科生命工学専攻	〒729-0292 福山市東村町字三蔵985-1	①カタユウレイホヤ神経特異的転写因子遺伝子の解析 ②カタユウレイホヤ
(学)山口良文	京都大学大学院生命科学部研究科形態形成機構学	〒606-8502 京都市左京区北白川追分町	① ②
(学)遠藤幸徳	東北大学大学院医学系研究科細胞生物学講座器官構築学分野	〒980-8575 仙台市青葉区星陵町2-1	①外胚葉性間葉の形成メカニズム ②ウズラ
(学)堅田智久	関西学院大学大学院理学研究科化学専攻生命科学	〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155	①初期発生における分子メカニズムの解明 ②アフリカツメガエル
(学)山田竜一	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科動物代謝	〒630-0101 生駒市高山町8916-5	①形態形成における転写調節因子の役割 ②マウス
(学)井垣達史	大阪大学大学院医学系研究科神経機能解剖学	〒565-0871 吹田市山田丘2-2	①細胞死の分子機構 ②ショウジョウバエ
(学)吉野 潤	北海道大学大学院理学研究科	〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目	①脳の再生 ②アフリカツメガエル
(学)小林大介	東京大学大学院神経生物学講座	〒113-0033 文京区本郷7-3-1	①脳のパターン形成 ②ニワトリ
(学)渡辺裕介	広島大学大学院理学研究科生物科学専攻発生生物学講座	〒739-8526 東広島市鏡山1-3-1	①変態・表皮分化 ②アフリカツメガエル
(学)種子島幸祐	東京大学総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系浅島研究室	〒153-8902 目黒区駒場3-8-1	①発生生物学 ②アフリカツメガエル
(学)呂 相燁	理化学研究所脳科学総合研究センター発生遺伝子制御研究チーム	〒351-0198 和光市広沢2-1	①Midline Stgralsとaxon gridarce ②ゼブラフィッシュ
(学)高橋身奈	筑波大学生物科学研究科	〒305-8572 つくば市天王台1-1-1	①配偶子機能に重要な遺伝子の探索と機能解析 ②粘菌

(学)島 康之	京都大学大学院理学研究科生物物理学教室竹市研究室	〒606-8502 京都市左京区北白川追分町	①神経回路発生 ②マウス
(学)新富圭史	東京工業大学大学院生命理工学研究科生命情報専攻	〒226-8501 横浜市緑区長津田町4259	①アフリカツメガエル卵におけるクロマチン形成機構 ②アフリカツメガエル
(学)富永健一	姫路工業大学理学部生命科学科細胞制御学Ⅰ講座	〒678-1297 兵庫県赤穂郡上郡町光都3-2-1	①鳥類初期胚の細胞の分化能 ②ニワトリ
(学)仙波 圭	熊本大学医学部遺伝発生医学研究施設発生遺伝部門	〒862-0976 熊本市九品寺4-24-1	①発生分化 ②マウス
(学)丸橋光次	大阪大学細胞生体工学センター	〒565-0871 吹田市山田丘1-3	①シーンターゲッティング ②マウス
(学)石田佳子	大阪大学細胞生体工学センター	〒565-0871 吹田市山田丘1-3	①脊椎動物における神経の発生及び分化における分子機構の解析 ②ニワトリ
(学)塩井 剛	名古屋大学理学研究科形態統御学講座神経発生生物学研究グループ	〒464-8602 名古屋市千種区不老町	①神経発生学 ②センチュウ
(学)澤井 哲	東北大学電気通信研究所沢田研	〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1	①パターン形成の物理的基盤 数理的アプローチ、振動 ②粘菌
(学)川本思心	北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻系統進化Ⅲ	〒060-0810 札幌市北区北10条西10丁目	①再生・生物のかたちづくり・発生・ボディープラン・バイオメカニズム・進化 ②ヤマトヒメミミズ
(学)柴田幹士	東京大学大学院理学系研究科生物科学専攻分子発生学研究室	〒113-0033 文京区本郷7-3-1	①頭部オーガナイザー特異的遺伝子の網羅的検索 ②アフリカツメガエル
(学)斎藤大介	東北大学大学院理学研究科生物学専攻井出研究室	〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉	①前肢・後肢の決定機構 ②ニワトリ
(学)松田大樹	東北大学理学部生物学教室	〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉	①四肢の再生 ②アフリカツメガエル
(学)熊坂真由子	東北大学大学院理学研究科生物学専攻発生生物	〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉	①色素細胞の発達・転写調節 ②アフリカツメガエル

(学)船越陽子	東京大学分子細胞生物学研究所	〒113-0032 文京区弥生1-1-1	①翅のパターン形成 ②ショウジョウバエ
(学)斬 燕	熊本大学大学院自然科学研究科	〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1	①Role of BMP-2-4 in the Spermato genesis ②アカハライモリ
(学)昌子浩登	九州大学理学研究科生物学専攻数理生物研究室	〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1	①数理的手法を用いた形づくりや 発生システムの研究
(学)宮田直政	東京都立大学理学研究科生物科学専攻	〒192-0397 八王子市南大沢1-1	①ショウジョウバエ新規遺伝子 Rap2-likeの機能解析 ②ショウジョウバエ
(学)石川牧子	東京大学大学院理学系研究科附属臨海実験所	〒238-0225 三浦市三崎町小網代1024	①精子の走化性現象 ②ユカタユウレイホヤ
(学)森田 強	東北大学大学院理学研究科生物学	〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉	①増殖、分化切り換え機構に関する研究 ②粘菌
(学)廣瀬滋規	東北大学理学部生物学教室	〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉	①増殖／分化の切り換え ②粘菌
(学)末次里奈子	奈良先端科学技術大学院大学分子発生生物学講座	〒630-0101 生駒市高山町8916-5	①形態形成、分節機構 ②ニワトリ
(学)長野隆志	九州大学大学院理学研究科細胞機能学講座小早川研究室	〒810-8560 福岡市中央区六本松4-2-1	①オーガナイザー形成のメカニズム ②アフリカツメガエル
(学)佐波理恵	京都大学医学部再生医学研究所発生分化研究分野	〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53	①MBH1の発現機構の解析 ②マウス
(学)福田勝之	千葉大学医学部発生生物学教室	〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1	①消化管の形態形成 ②ニワトリ
(学)小泉健一	千葉大学大学院医学研究科発生生物学教室	〒260-8670 千葉市中央区亥鼻1-8-1	①Presenilin1の形態形成コントロール
(学)石川博康	川崎医科大学産婦人科	〒701-0192 倉敷市松島577	①肢芽のアポトーシス
(学)鈴木幸子	川崎医科大学産婦人科	〒701-0192 倉敷市松島577	①トリプトファン代謝
小倉 淳郎	国立感染症研究所獣医学部	〒162-8640 新宿区戸山1-23-1	①受精・胚発生 ②マウス
井上 俊介	徳島大学ゲノム機能研究センター	〒770-8503 徳島市蔵本町3-18-15	①RNA結合タンパク質による遺伝子の発現制御と細胞の分化 ②ニワトリ、マウス

中村 俊	国立精神・神経センター 神経研究所診断研究部	〒187-8502 小平市小川東町4-1-1	①神経発生・領域形成、機能カラム形成 ②ニワトリ
本多 淳一	京都大学再生医科学研究 所生体分子設計学分野	〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53	①
伏見 浩	福山大学海洋生物工学科	〒729-0292 福山市東村町字三蔵985-1	①魚類の形態形成 ②ヒラメ、オニオコゼ、マダイ
辻 浩一郎	東京大学医科学研究所 細胞療法研究部	〒108-8639 港区白金台4-6-1	①血液発生 ②マウス、ヒト
近藤 隆	理化学研究所脳科学総 合研究センター	〒351-0198 和光市広沢2-1	①染色体構造と部位特異的転写制御の関係 ②マウス
井上 達	国立医薬品食品衛生研 究所毒性部	〒158-8501 世田谷区上用賀1-18-1	①分子発生、胚発生 ②マウス
(学)榎田武史	兵庫教育大学自然系生 物	〒673-1494 兵庫県加東郡杜町下久米 942-1	①鳥類性腺の形態形成機構 ②ニワトリ
(学)伊藤正孝	防衛医科大学校解剖学 第一講座	〒359-8513 所沢市並木3-2	①顔面頭蓋の形態形成 ②マウス
(学)大野忠行	東北大学大学院医学系 研究科小児病態学	〒980-8574 仙台市青葉区星陵町1-1	①心臓発生 ②ニワトリ、マウス
(学)日吉真照	熊本大学理学部生物科 学科	〒860-8555 熊本市黒髪2-39-1	①生殖細胞形成 ②アフリカツメガエル
(学)小西雅子	神戸大学大学院自然科 学研究科生物学専攻遺 伝子実験施設深見研究 室	〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1	①生体分子構造、発生、生殖 ②アフリカツメガエル等
(学)佐藤健一	東北大学大学院医学研 究科神経外科学	〒980-0872 仙台市青葉区星陵町1-1	①哺乳類大脳皮質形成 ②ラット
(学)加藤 輝	国立遺伝学研究所総合 研究大学院大学	〒411-8540 三島市谷田1111	①
(学)中川雅博	近畿大学農学部水産生 物学研究室 I	〒631-8505 奈良市中町3327-20	①細胞工学的手法を用いた希少魚類の再生復元 ②魚類（淡水）全般

<会員資格変更>

学生→正会員

安西 弘子 神奈川科学技術アカデミー宮島「幹細胞制御」プロジェクト

〒216-0001川崎市宮前区野川 907 帝京大学生物工学研究センター 1 F

久保田幸彦 理化学研究所筑波研究所実験動物室 〒305-0074 つくば市高野台3-1-1

森部 弘樹 大阪大学微生物病研究所発生遺伝学分野 〒565-0871 吹田市山田丘3-1

木庭 正宏 日本新薬(株)東部創薬研究所総務部動物管理係 〒305-0003 つくば市桜3-14-1

塩塚 政孝 早稲田大学人間科学部人間基礎科学科 〒359-1192 所沢市三ヶ島2-579-15

恒川 直樹 三菱化学生命科学研究所 〒194-8511 町田市南大谷11

中條 信成 九州大学理学部生物学科発生生物学講座 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

千葉 章太 京都大学大学院理学研究科動物学教室 〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

田中 仁夫 甲南大学理学部生物学科 〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1

田村 美和 お茶の水女子大学理学部生物学教室根本研究室 〒112-8610 文京区大塚2-1-1

有泉 高史 東京大学大学院総合文化研究科浅島研究室 〒153-8902 目黒区駒場3-8-1

望月 敦史 九州大学大学院理学研究院生物科学部門 〒812-8581 福岡市東区箱崎6-10-1

大崎加奈枝 国立精神・神経センター神経研究所診断研究部 〒187-8502 小平市小川東町4-1-1

柴田 安司 〒470-1122 豊明市西川町長田14-7

吉田 徳之 東北大学大学院農学研究科資源生物科学専攻動物生産科学講座

〒981-8555 仙台市青葉区堤通雨宮町1-1

白土 明子 金沢大学薬学部薬効動態学講座 〒920-0934 金沢市宝町13-1

朝比奈欣治 (財)広島県産業技術振興機構広島県組織再生P 広島県産業科学技術研究所

〒739-0046 東広島市鏡山3-10-32

奥田 智彦 国立循環器病センター研究所病因部 〒565-8565 吹田市藤白台5-7-1

小針布実子 北海道大学実験生物センター 〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

岡林 浩嗣 理化学研究所脳科学総合研究センター神経再生部門 〒351-0198 和光市広沢2-1

吉水 朋美 大阪府立母子保健総合医療センター研究所病因病態部門

〒594-1101 和泉市室堂町840

越田 澄人 科学技術振興事業団E R A T O 近藤誘導分化プロジェクト

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町14 近畿地方発明センター

山口 雅裕 第一製薬(株)東京研究開発センター創薬開拓研究所 〒134-8630 江戸川区北葛西1-16-13

中村 由紀 大阪大学大学院医学系研究科神経機能解剖 〒565-0871 吹田市山田丘2-2

酒井 章衣 岡崎国立共同研究機構基礎生物学研究所発生生物学研究系生殖研究部門

〒444-8585 岡崎市明大寺町字西郷中38

柴田 典人 三菱化学生命科学研究グループS L 〒194-8511 町田市南大谷11

丹羽 勝利 〒602-0843 京都市上京区中筋通石薬師下ル新夷町385-2 ハイマートGB

馬場浩太郎 農林水産省蚕糸・昆虫農業技術研究所 〒305-8634 つくば市大わし1-2

高橋 源尚 〒411-0801 三島市谷田66-14 シティハイツ小糸102

日下部りえ 北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻 〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

成田 知弘 川崎医科大学分子生物学教室 〒701-0192 倉敷市松島577

伊藤実和子 〒305-0005 つくば市天久保2-11-11-203

石川 亜紀 〒259-1143 伊勢原市下糟屋2235-2 メゾンアルタイル206

服藤 尚恵 国立遺伝学研究所発生遺伝研究部門 〒411-8540 三島市谷田1111

望月 一史 国立遺伝学研究所発生遺伝研究部門 〒411-8540 三島市谷田1111

三浦 岳 京都大学大学院医学研究科解剖1 〒606-8315 京都市左京区吉田近衛町

四宮 愛 科学技術振興事業団近藤誘導分化プロジェクト
〒606-8305 京都市左京区吉田河原町14 近畿地方発明センタービル

李 智博 北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻生体情報分子学講座1
〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

田崎 啓 理化学研究所脳科学総合研究センター神経再生研究チーム
〒351-0198 和光市広沢2-1

後藤 利保 Keller Lab., Dept. of Biology, Virginia Univ.
Gilmer Hall, Charlottesville, VA 22903, U.S.A

国内→海外

白崎 竜一 Gene Expression Lab., The Salk Inst.
10010 North Torrey Pines Rd., La Jolla, CA 92037, U.S.A

山中庸次郎 The Rossant Lab., Mount Sinai Hosp.
600 University Ave., Rm. 844, rm884 Toronto, Ontario M5G 1X5, Canada

福田 公子 Dept. of Genetics and Development, Columbia Univ.
701 West 168th St., #1620 New York, NY 10032, U.S.A

森島 正恵 Dept. of Pediatrics, Baylor Coll. of Med
One Baylor Plaza, Houston, TX 77030, U.S.A

後藤 利保 Keller Lab., Dept. of Biology, Virginia Univ.
Gilmer Hall, Charlottesville, VA 22903, U.S.A

海外→国内

舟橋 淳一 東北大学加齢医学研究所分子神経研究分野 〒980-8575 仙台市青葉区星陵町4-1

<住所変更>

天野 實		〒739-0413 広島県佐伯郡大野町宮島口上2-2-3
平野 茂樹	新潟大学医学部保健学科検査技術科学専攻	〒951-8518 新潟市旭町通二番町746
中澤 透	放送大学	〒261-8586 千葉市美浜区若葉2-11
宇野 修正	ウェルファイド(株)中央研究所	〒573-1153 枚方市招提大谷2-25-1
大内 淑代	徳島大学工学部生物工学科	〒770-8506 徳島市南常三島町2-1
斎藤哲一郎	京都大学再生医科学研究所発生分化研究分野	〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
多田 高	京都大学再生医科学研究所発生分化研究分野	〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
多田 政子	京都大学再生医科学研究所発生分化研究分野	〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
飯村 忠浩	東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科分子発生学分野	〒113-8549 文京区湯島1-5-45
舟橋 久幸	昭和大学医学部第一解剖学教室	〒142-8555 品川区旗の台1-5-8
久保田幸彦	理化学研究所ライフサイエンス筑波研究センター実験動物開発室	〒305-0074 つくば市高野台3-1-1
森部 弘樹	大阪大学微生物病研究所発生遺伝学分野	〒565-0871 吹田市山田丘3-1
吉田 徳之	東北大学農学研究科資源生物科学専攻動物生産科学講座動物生殖科学	〒981-8555 仙台市青葉区堤通雨宮町1-1
中馬新一郎	京都大学再生医科学研究所発生分化研究分野	〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
阿形 清和	岡山大学理学部生物学科再生発生研究室	〒700-8530 岡山市津島中3-1-1
中村 正久	早稲田大学教育学部生物学教室	〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1
三田 雅敏	帝京短期大学	〒151-0071 渋谷区本町6-31-1
松本 緑	慶應義塾大学大学院理工学研究科生命理工学	〒223-8522 横浜市港北区日吉3-14-1
喜納 宏昭	(株)ディナベック研究所	〒305-0856 つくば市観音台1-25-11
千葉 章太	京都大学大学院理学研究科動物学教室	〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
有泉 高史	東京大学大学院総合文化研究科浅島研究室	〒153-8902 目黒区駒場3-8-1
塘 忠顕	福島大学教育学部	〒960-1296 福島市金谷川1
岡林 浩嗣	理化学研究所脳科学総合研究センター神経再生部門	〒351-0198 和光市広沢2-1
山口 雅裕	第一製薬(株)東京研究開発センター創薬開拓研究所	〒134-8630 江戸川区北葛西1-16-13
柴田 典人	三菱化学生命科学研究所グループS L	〒194-8511 町田市南大谷11
高橋 源尚	国立遺伝学研究所哺乳動物遺伝研究室	〒411-8540 三島市谷田1111
李 智博	北海道大学大学院理学研究科生物科学専攻生体情報分子学講座1	〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目

石原 (小原) 朋子	MGH Renal Unit	149 13th St., Charlestown, MA 02129, U.S.A
中山 圭子	富山赤十字病院歯科口腔外科	〒930-0859 富山市牛島本町2-1-58
藤本 晃久	東京大学医学部産婦人科学教室	〒113-0033 文京区本郷7-3-1
吉川 美加	新潟大学大学院自然科学研究科生命システム科学	〒950-2181 新潟市五十嵐二の町8050
佐波 理恵	京都大学再生医科学研究所発生分化研究分野	〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53

<退会>

吉 原 基二郎	辻 恵美子	高 橋 直	中 田 勝 紀	駒 口 智佳子
Cabrera Jocelyn	岡 南 政 宏	飯 島 美 帆	綿 貫 公美子	木 山 貴 恵
鈴 木 勝 也	太 田 次 郎	近 藤 昭 夫	坂 倉 照 好	滝 沢 聡
藤 原 篤 志	木 戸 麻 実	赤 星 軌 征	柴 田 由美子	今 泉 隆 志
古 本 敬 明	柴生田 葉 子	森 谷 光 昭		

〔賛助会員〕

生命誌研究館	〒569 高槻市紫町1-1 -1125 T E L 0726-81-9750
先端テクノロジーをサポートする日京テクノス(株)	〒113 文京区本郷2-17-8鈴木ビル -0033 T E L 03-3814-2066
三菱化学生命科学研究所	〒194 町田市南大谷11号 -8511 T E L 0427-24-6226
(有)共進理工“細胞分別”ナイロンメッシュ	〒113 文京区本郷5-13-1ドエル本郷205 -0033 T E L 03-3813-1073

賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会

会長 竹市雅俊

近年、ライフサイエンス、バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ、生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は、発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で、日本を主に、外国の発生学者を混じえて約1,300名を結集しております。発生学は、言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており、最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題、癌細胞の基礎的研究、老化の問題等も発生生物学の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は、これらの分野での活発な研究者を会員としております。又、本学会の刊行致しております欧文誌“Development, Growth and Differentiation”(DGD)もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては、このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒、本学会趣旨に御賛同の上、賛助会員として本会を御支援賜りますよう御願い申し上げます。

なお、賛助会員は年3回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され、本会の刊行する欧・和文刊行物(会員名簿を含む)が配布されます。会費は、一口三万円を申し受けております。御入会の際は、入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局(井出宏之)

〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉 東北大学大学院理学研究科生物学教室内

TEL:022-217-3489 FAX:022-217-3489

e-mail:jsdb@bcasj.or.jp

-----切-----り-----取-----り-----線-----

日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年 月 日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

(_____ 口 _____ 円)

住 所

会 社 名

担当者名

電話番号

印

広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学、医学、薬学、農学をはじめ分子生物学、細胞生物学、遺伝学など、さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり、国内外に約1,300人の会員を持っております。

英文学術雑誌 Development, Growth and Differentiation は、日本発生生物学会の機関誌で年6回発行し、国内に約1,200部、国外に約600部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年3回配布致しております。

目下、本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等、是非ご協力頂きますようお願い致します。

広 告 料			
DGD 本誌	1 頁	年 6 回	150,000円
	半 頁	〃	78,000円
インフォメーション	1 頁	年 3 回	90,000円
サーキュラー	半 頁	〃	45,000円

尚、サーキュラー用の版下作製代は実費をいただきます。裏表紙は1頁10,000円高となります。

申込先：日本発生生物学会事務局（井出宏之）

〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉 東北大学大学院理学研究科生物学教室内

TEL:022-217-3489 FAX:022-217-3489

e-mail: jsdb@bcasj.or.jp

----- 切 り 取 り 線 -----

広告申し込み書

年 月 日

日本発生生物学会 御中

広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

☐ DGD 本誌	1 頁
☐ 〃	半 頁
☐ サーキュラー	1 頁
☐ 〃	半 頁
住 所	
会 社 名	
担当者名	
電話番号	

㊟

This image shows a full page of a worksheet designed for handwriting practice. It consists of approximately 20 horizontal dashed lines spaced evenly across the page, providing a guide for letter height and placement. The background is plain white, and there are no other markings or text present.

[illegible]

XENOPUS
Oocyte

ホームページ開設

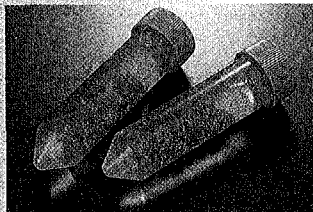
XENOPUS

- 恵まれた自然環境の下で育った良質のアフリカツメガエル。

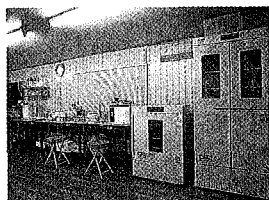


Oocyte

- 飼育管理に時間をとれない方や、実験を効率よく進めたい方にはOocyteを直送致します。



<http://www.copacetic.co.jp>



COPACETIC

株式会社コパセティック

〒036-1511 青森県中津軽郡相馬村大字坂市沢113-3

TEL 0172(84)3509 FAX (84)3510

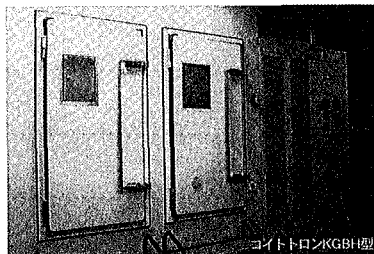
フリーダイヤル：0120-084896

フリーダイヤル ゼノバスはクローン

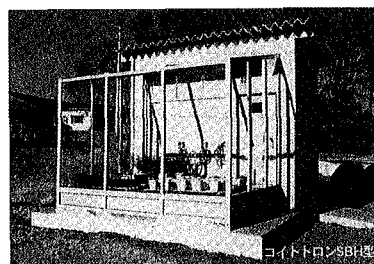
Koito
安全と快適を求めて

バイオ関連の試験・研究を バックアップ

小糸工業のバイオハザード対応グロースキャビネットは、周囲環境の影響を受けずに、圧力コントロールシステムで実験室内を陰圧に保持します。また、コンパクトで高性能なフィルターユニットとの組み合わせで、実験対象物への空気流による外界からの悪影響を遮断、簡単操作をプラスして、高精度な温・湿度を再現します。



コイトロンKGBH型



コイトロンSBH型

バイオハザード対応
グロースキャビネット **SBH/KGBH** シリーズ

小糸工業株式会社

東京本部 〒108-8723 東京都港区高輪3丁目5番23号(日生高輪台ビル) ☎03(3443)9846 FAX 03(3443)6570
札幌011(722)5211 東北022(226)7501 大阪06(6263)6371 九州092(431)0838 筑波0298(51)2311 沖縄098(861)1805
URL <http://www.mmjp.or.jp/koito-environ> メールアドレス koito-environ@tokyo.email.ne.jp

Kluwer Academic Publishers

Evolutionary Developmental Biology, 2nd Ed.

by **Brian K. Hall**

Sept. 1998 Hard 512 pp. 0-412-78580-3 ¥33,800

Aug. 1999 Pap 512 pp. 0-412-78590-0 ¥8,120

Contents: Preface. Part 1: Evolution and Development, Phyla and Fossils. Part 2: Form and Function, Embryos and Evolution, Inheritance Systems. Part 3: Embryos in Development. Part 4: Embryos in Evolution. Part 5: Embryos, Environment and Evolution. Part 6: Development Evolves. Part 7: Patterns and Processes, Time and Place. Part 8: Principles and Processes. References. Index.

Cell and Molecular Biology of the Ear

edited by **David J. Lim** and **Janet Stoeckert**

July 2000 Hard 212 pp. 0-306-46374-1 ¥21,900

Contents: I: Mechanoreceptor Biology. II: Developmental Biology of the Ear. III: Genes and Deafness. IV: Gene-based Therapy for Sensorineural Hearing Loss.

The Biology of Early Influences

edited by **Richard L. Hyson** and **Frank Johnson**

Feb. 2000 Hard 212 pp. 0-306-46298-2 ¥18,850

This book covers three stages of development: (1) embryonic or perinatal manipulations; (2) manipulations early after birth or hatching; (3) major periods of transformation in the organism's life.

Contents: Acknowledgments. General Introduction. I: Lifelong Influences From the Beginning. II: Youthful Exposure. III: Transformations. Index.

Molecular and Cellular Mechanisms of Neuronal Plasticity: Basic and Clinical Implications:

Proceedings of the Neuroscience Symposium, Staten Island of The City Univ. of N.Y., and The CSI/IBR Center for Developmental Neuroscience, NY, and The City Univ. Graduate School, N.Y.

edited by **Yigal H. Ehrlich**

(*Advances in Experimental Medicine and Biology Vol. 446*)

Mar. 1999 Hard 238 pp. 0-306-46040-8 ¥16,570

This volume presents research areas which have not been highlighted in the past. The first section of the volume presents studies of basic mechanisms operating in a wide range of adaptive processes. The second section presents recent advances in investigations that have demonstrated the clinical implications of this research.

Information Processing in Cells and Tissues

Proceedings of an International Workshop held in Sheffield, UK, September 1-4, 1997

edited by **Mike Holcombe** and **Ray Paton**

June 1998 Hard 0-306-45839-X ¥15,270

Evolutionary Biology, Vol. 32: Limits to Knowledge in Evolutionary Genetics

edited by **Michael T. Clegg**

July 2000 Hard 266 pp. 0-306-46227-3 ¥12,670

Contents: Section I: Limits to Knowledge: an Introduction. Section II: The Philosophy of Biology, Paradigms and Paradigm Shifts. Section III: Limits to Historical Inference and Prediction. Section IV: Quantitative Genetics and the Prediction of Phenotype from Genotype. Conclusions. Index.

詳細は下記までお問い合わせください。

•表示の価格は、原価の改定、為替レートの変動等により予告なしに変更される事がありますので、予めご了承下さい。
また表示の価格に消費税は含まれておりません。



日本総代理店
株式会社 ニュートリノ
<http://www.neutrino.co.jp/>

本社: 〒182-0024
東京都調布市布田 1-44-3 高橋ビル
TEL: 0424-84-5550
FAX: 0424-84-5556
E-mail: neutrino@coral.ocn.ne.jp

カール ツァイス パーソナルコンフォーカルシステム

LSM 5 PASCAL

Personal Laser Scanning confocal



New!

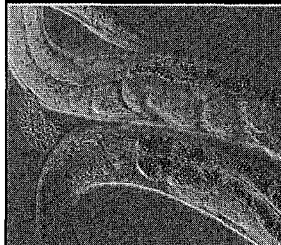
新設計の小型軽量化スキャンング
モジュール

New!

新開発レーザーコントロール・
モジュール

New!

ユーザが簡単に交換可能な
ビームスプリッター、
蛍光フィルター類



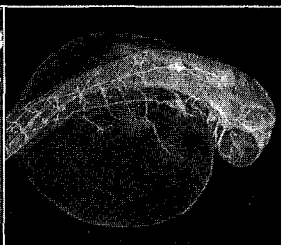
C. elegans with embryos, autofluorescence + DIC,
(single frame out of time series). (Sample courtesy
of Dr. Afua, MBL Woods Hole)



Fetal small intestine, double fluorescence, stereo
projection (Dr. Hashimoto, Jikei University,
Tokyo)



Drosophila brain, neural circuit indicated with
GFP (Dr. Ito, NI of Basic Biology Lab, Okazaki)



Zebrafish embryo, neurons (green), NCAM (red)
(Dr. Marx, Dr. Bostmeyer, Uni Konstanz)

- システムはフルオートでコントロール及び設定可能
- 2048 x 2048/12bit/各チャンネルの高画質
- DSP 技術を用いた多彩なスキャンモード
- マルチトラッキングスキャンにより、多重蛍光標本の蛍光波長のかぶりを解消
- 多彩な 2D、3D 解析機能と、画像管理に便利なイメージデータベース
- タイムコースソフトウェアによる多彩な時間解析機能、外部トリガ機能

このほかにも数多くの新開発・新設計・すぐれた技術が搭載されております。

輸入/販売元
カール ツァイス 株式会社
顕微鏡部

〒160-0003 東京都新宿区本塩町 22 番地
Tel 03-3355-0332 Fax 03-3358-7554
URL <http://www.zeiss.co.jp>
営業所：大阪/名古屋/福岡/仙台

